

# マイウェイ

No.50  
2003

## ◎創刊50号記念 かながわ文学散歩物語

監修 梶立神奈川近代文学館  
写真 松尾順造

財団法人神奈川文学振興会

財団法人はまぎん産業文化振興財団

平成15年9月発行 ● 発行人 平澤貞昭 ● 編集人 清水照雄 ● 発行 財団法人はまぎん産業文化振興財団 〒220-8611 横浜市西区みなとみらい3-1-1 ☎045-225-2171 (直通) ㈱西北社 大日本印刷㈱



# 創刊五十号を迎えるに当たって

財団法人はまきん産業文化振興財団 理事長 平澤貞昭

このたび「マイウェイ」は、お陰様をもちまして、創刊五十号を迎え、記念号として、「かながわ文学散歩物語」を刊行いたします。皆さま方の長年にわたる温かいご支援と、ご協力に、厚く御礼を申し上げます。

「マイウェイ」は、平成元年に横浜銀行が、郷土かながわの文化と暮らしに関する情報を広く地域の皆さま方に紹介する冊子として創刊いたしました。その後、平成七年に当財団の機関紙「カルチャートーク」と統合し、新たに機関誌として出発して今日に至っております。この間、「マイウェイ」は、小さいながら

ら地元の文化情報発信の一端を担い、広く皆さま方のご愛読をいただくことができました。

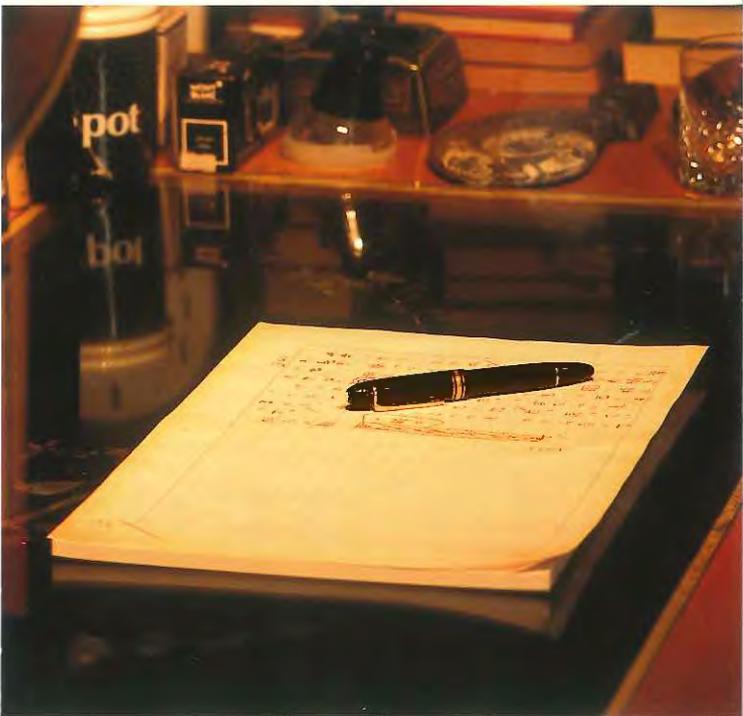
当記念号では、県内随所にあります文学作品ゆかりの地を訪ね、その地に残る名作の足跡あしあとをご紹介することといたしました。郷土の文学と散歩を愛好される皆さま方に、お役立ていただきますれば、誠に幸甚こうしんでございます。

これからも、郷土かながわの文化と産業の生き生きとした姿を、「マイウェイ」誌上でご紹介して参る所存でございます。引き続きましてのご支援とご愛読を、ひとえにお願い申し上げます。

## 目次

4	横浜
14	川崎
18	鎌倉
28	三浦半島
36	湘南
42	小田原
49	真鶴・湯河原
55	箱根・県央
63	神奈川県近代文学館のご案内
64	財団のご案内
65	バックナンバーのご案内
66	記念講演会のご案内
67	年金相談サービス・編集後記

表紙／大佛次郎記念館内に復元された大佛次郎の書斎。  
裏表紙／高木敏子「ガラスのうさぎ」像(二宮駅南口)。



# かながわ 文学散歩物語

— 名作の舞台を訪ねて —

上ノ開高健の書斎と原稿  
(茅ヶ崎市開高健記念館)。

# 一 横浜

モダン都市ヨコハマは、大佛次郎、長谷川伸、吉川英治などを育てた、文学の港町です。



三代歌川広重画「横浜各国商館真図」大仏堅絵  
3枚（部分）明治5年 横浜開港資料館蔵。

## 「霧笛」と「午後の曳航」

横浜を代表する作家といえば、まず大佛次郎があげられます。その大佛の代表作「霧笛」は、明治初年の外国人居留地が舞台。

イギリス人商人の使用人である日本人青年と、この商人に囲われている日本人女性が織りなす悲恋物語で、当時の横浜のエキゾチックで妖しげな雰囲気濃厚に描かれています。開港期の横浜を知るうえで欠かせない作品です。

現在、大佛次郎記念館のある山手の一角は、

横浜のなかでも最も文学的なエリアといえるでしょう。港の見える丘公園は、かつてはイギリス兵舎のあったところ。その先端に立てば、横浜港が一望できます。

「あなたの船がここから見えたらいのに」  
「あんな町外れの埠頭じゃね」

彼は女の体をうしろから抱いて港を眺めた。

これは、三島由紀夫の「午後の曳航」の1節。主人公の少年の美しい母親と航海士の恋人とのラブ・シーンです。作者は足しげく横浜に通い、創作ノートをつくり、横浜ならではの風物を鮮やかに描き出しました。



文明開化の時代を偲ばせる  
レストラン「山手十番館」。

右/山手資料館。明治42年に建てられた横浜最古の西洋館。当時の横浜の暮らしを伝える生活用具が展示されています。下/異国情緒たどる街角。



## 長谷川伸から村上龍まで

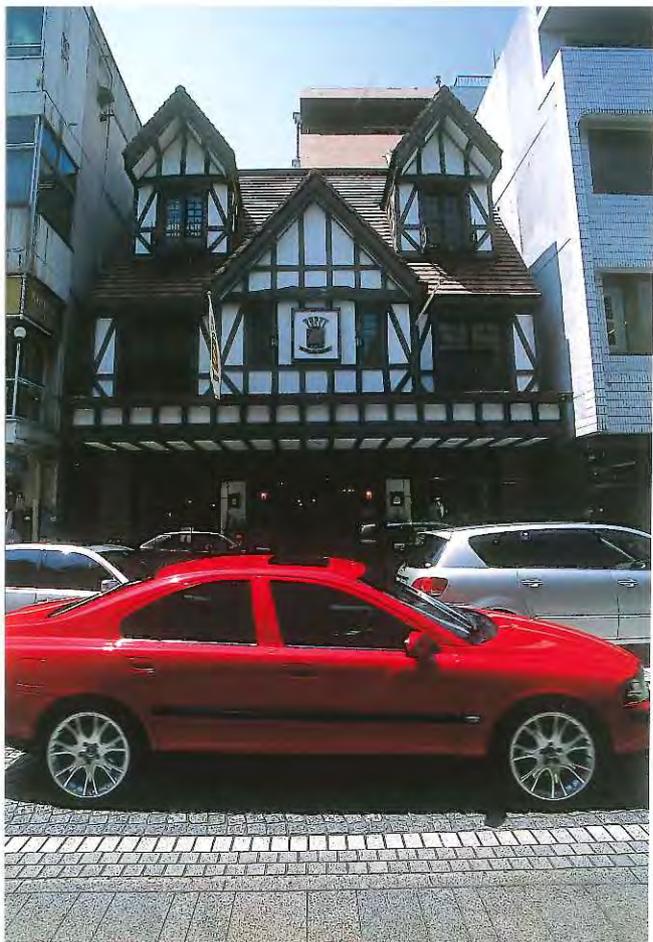
港の見える丘公園から見てもランドマークタワーの高いことがよく分かります。タワーの立つ一帯がMM21地区。ここにはかつて横浜船渠会社がありましたが、そのドックで働いていたのが「険の母」を書いた長谷川伸と「宮本武蔵」の吉川英治。二人とも横浜生まれで、それぞれ横浜を舞台にした作品を執筆しています。長谷川は、「船米巾着切」で開港期の横浜を描き、吉川は、「かんかん虫は唄う」「雉子郎物語」において、ドックでの辛い体験を告白しています。

丘公園から外国人墓地へ回ると、墓地内のエキゾチックな雰囲気なかに、ちよっと場違いな感じで中島敦の文学碑があります。



上ノ三菱重工・横浜造船所のドック跡。左ノ日本丸メモリアルパーク内に建つ長谷川伸の文学碑。

った赤い土にゆつくりと雨が流れ染みていく時の匂いをヨシヒコは知らないまま育つだろう。」(村上龍「テニスボーイの憂鬱」)  
この文章はそんな新しい人間ドラマの可能性を暗示しています。



「元町の洋館」『ポニー』。三島由紀夫の『午後の曳航』で、主人公の母親の経営する高級洋品店のモデルに。

「海は霧ではつきりしないが、<sup>巨大</sup>大きな汽船達の影だけは直ぐに判る。時々ポニーポニーと汽笛が響いて来る。  
代官坂の下から、黒衣を被<sup>か</sup>いた天主教の尼さんが、ゆつくり上がって来る。」

中島が「かめれおん日記」の中に「スイドモア氏の碑の手前に腰を下ろす」と記したことから、シ(スイ)ドモア女史の墓の隣に文学碑が設置されました。

横浜の文学というと、港、あるいはその周辺を舞台にした作品が中心でした。しかし、内陸部への人口増加が進むと、従来とは違った人間ドラマが生まれてくるのでしょうか。

「雑木林や畑はどんどんなくなってゆく。ヨシヒコが歩くのは東京や他の街と変わらないコンクリートやアスファルトの道だ。乾きき

## 大佛次郎とホテルニューグランド

大佛次郎がホテルニューグランドの318号室を仕事部屋にしたのは昭和六年頃からで、その部屋は「天狗の部屋」と呼ばれました。ちょうどこの頃に生まれたのが「霧笛」です。

横浜で生まれ、東大卒業後、外務省に勤めていた大佛は、二十六歳の時に「隼の源次」でデビューし、翌年「鞍馬天狗」シリーズの第一作「鬼面の老女」を発表して一躍スター作家の仲間入りを果たします。そしてこの年、外務省を辞めて、小説に専念。しかし、「鞍馬天狗」のイメージはあまりにも強く、それが大佛を苦しめたのかもしれない。驚物小説か

らの脱皮を考えて、生まれ故郷の横浜を徘徊する日々が続きます。山手から元町、中華街など、「霧笛」の舞台である開港期の横浜を偲ぶのでの散策。それには足場のいいホテルに仕事場を設けるのが最適です。こう考えてニューグランドに投宿し、それが十年間にも及びます。

ホテルニューグランドがオープンしたのは昭和二年です。それも外国人専用のホテルとして造られました。当時、ホテルといえば、海外から来日する外国人が宿泊する施設であり、日本人の利用などは考えられませんでした。そのような時代にいち早くホテル住まいを始めて、日



客室として使用の際は大佛次郎の写真を外しています。

本の中の異国の雰囲気味わいながら作品が生み出されていたのです。

ホテルの部屋で一人霧笛の音を聞き、仕事に疲れたら、一階のバーのカウンターに座って静かにブランデーを飲む。それも水割りで飲むのが大佛流。「霧笛」の中にも、居留地の酒場で主人公がブランデーを飲むシーンをさりげなく導入しています。



平成4年にリニューアルしたホテルニューグランドですが、外観をはじめ、創業時の趣がそのまま残されています。右は、ホテル新館高層階から眺めた横浜港。

本文中の①から③の所在地は概略図を参照。

## 山手を歩く

### ◆大佛次郎「霧笛」

大佛次郎（一八九七—一九七三）は横浜・英町に生まれ、八歳まで居住。一般的には「鞍馬天狗」が有名ですが、「霧笛」「幻燈」「花火の街」「薔薇の騎士」など幕末・開港期の横浜を描いた作品を数多く発表。とくに「霧笛」は、商館の使用人と英国人の愛人との悲恋物語で、開国当時の横浜居留地の風俗がふん



大佛次郎記念館。

だんに盛り込まれています。居留地は「日本の領土内に珍しい異国の花をさかせた花園」と、作者自身が語っています。

### ◆中島敦「かめれおん日記」



中島敦「山月記」の碑。

中島敦（一九〇九—一九四二）が横浜高等女学校（現・横浜学園）の教師時代に、生徒からもらったカメラオンを素材に執筆した作品で、主人公が外国人墓地に立ち寄り、生のはかなさを感じる場面が印象的。横浜学園元町幼稚園①に立つ文学碑には代表作「山月記」

が横浜高等女学校（現・横浜学園）の教師時代に、生徒からもらったカメラオンを素材に執筆した作品で、主人公が外国人墓地に立ち寄り、生のはかなさを感じる場面が印象的。横浜学園元町幼稚園①に立つ文学碑には代表作「山月記」

の一節が。外国人墓地にも文学碑が。

### ◆有島武郎「二房の葡萄」

有島武郎（一八七八—一九三三）の作品中最もよく知られているのが、この童話。山手のミッシヨン・スクールに通っていた頃の思い出をもとに執筆。処女作「かんかん虫」や代表作「或る女」も横浜が舞台。

### ◆中里恒子「まりあぬ物語」

中里恒子（一九〇九—一九八七）は七歳の時に一家で横浜に転居。その後、横浜紅蘭女学校（現・横浜雙葉学園）に入学。「まりあぬ物語」（後に「墓地の春」と改題）は、外国人墓地②に埋葬された姪ミドリをモデルに書

山手外国人墓地にある中里ミドリの墓。



かれたもので、横浜のエキゾチックな雰囲気を楽しめる作品です。

### ◆大正活映の碑

大正活映は大正八年に創立された映画会社。一時期、谷崎潤一郎も脚本を執筆。その跡地に記念碑⑤が。

### ◆山手ゲーター座跡

開港当時、日本で最初にシェイクスピア劇を上演した劇場で、芥川龍之介も数回訪れ、大正元年には本邦初公開の「サロメ」を観劇しています。現在は石崎博物館④に。



概略図  
yokohama

## 横浜の文学館・記念館

### 神奈川近代文学館

神奈川ゆかりの作家と作品を通して近代文学の流れが分かりやすく紹介されています。図書、雑誌などを収蔵する閲覧室も充実。文学講座、講演会なども開催⑤。（63ページ参照）

### 大佛次郎記念館

猫好きの作家にちなんで大佛次郎記念館玄関脇に猫のオブジェが。

横浜で生まれ、横浜を愛した文豪・大佛次郎の記念館⑥。初期の代表作「鞍馬天狗」から文筆活動の集大成といわれる「天皇の世紀」までの歩み、氏の遺稿、遺品、蔵書などで紹介。晩年の書齋が復元・展示されています。●毎月第4月曜日 館／有料／☎045-622-5020



## 港とその周辺

### ◆横浜開港資料館

旧英国領事館建物を利用し、幕末・開港期の横浜の歴史的資料十数万点を収蔵・展示⑦。中庭には日米和親条約ゆかりの玉櫛が葉を茂らせ、横浜の文学散歩には欠かせないポイントの一つ。●月曜休館／有料／▽04512012100



資料館中庭の玉櫛

### ◆獅子文六「父の乳」

獅子文六（一八九三―一九六九）は横浜弁天通の生まれ。父親は居留地で外国人向けに絹織物を販売する商館

を経営。その華やかな時代の思い出が自伝的小説「父の乳」に。また「やつさもつさ」では、横浜を舞台にして敗戦後の混乱した社会が風刺的に描かれています。

### ◆里見弴「多情仏心」

里見弴（一八八八―一九八三）は有島武郎・生馬の末弟。繊細な心理描写を得意とする作家。中華街の老舗の料理店「聘珍樓」が代表作「多情仏心」の舞台の一つに。

### ◆長谷川伸「舶来巾着切」

長谷川伸（一八八四―一九六三）は横浜口ノ出町生まれ。生家はもとと土木請け負い・材木商を営んでいたが、父親の代で没落し、一家離散。少年時代から職を転々とし、その経験が「臉の母」や「一本刀上俵人」に。「舶来巾着切」は、横浜を背景に

美貌のスリが活躍する物語。日本丸メモリアルパークに文学碑⑧が。

### ◆吉川英治「かんかん虫は唄う」

吉川英治（一八九二―一九六三）は横浜根岸に生まれ、父の事業の失敗で小学校を中退し、船具工などさまざまな職を経て作家に。「かんかん虫」とは造船所のドックで船のサビ落としをする労働者のことで、この時の体験が作品に投影されています。

### ◆三島由紀夫「午後の曳航」

主人公は美しい母親と暮らす十三歳の少年。物語は、母親とその恋人の航海上に対する少年期特有の純粋で残酷な心理を軸に展開。高島埠頭をはじめ、



横浜赤レンガ倉庫



明治時代は唐人街、大正時代には南京街と呼ばれた中華街

### ◆吉行淳之介「砂の上の植物群」

化粧品店のセールスマンと十八歳の少女とその姉との奇妙な三角関係を描いた、吉行淳之介（一九二四―一九九四）の代表作の一つで、夕日に燃える横浜港の情景が、中年に差しかった主人公の心

象風景として描かれています。

### ◆五木寛之「海を見ていたジョニー」

舞台は、港に近い飲食店街の「ピアノ・バー（店名）」。主人公の少年と姉との店。ここにふらりとやってきた黒人兵ジョニーとの出会いと別れがベトナム戦争とジャズをモチーフとして語られます。ジャズの街、横浜の表情をほうふつとさせる、五木寛之（一九三二）による青春文学の傑作。なお、モデルとなった「ピアノ・バー」は、かつて中華街の一角にあったとのこと。



海岸通りにあるジャズバー

### ◆生島治郎「傷痕の街」

「運河は濁っていた。いつも、濁っているのだ。」で始まるハードボイルド小説。長らく横浜に暮らした作家・生島治郎（一九三二―二〇〇二）の処女長編で、昭和三十年代後半のミナトの風物が鮮やかに描かれています。

### ◆港崎町と「岩亀楼」

横浜開港時に開設された遊廓街が港崎町。その中の一軒「岩亀楼」の岩亀楼ゆかりの石灯籠。花魁・亀遊が



岩亀楼ゆかりの石灯籠

西洋人の困い者になることを恥じて自害するという事件を題材に、有吉佐和子（一九三一―八四）は、戯曲「ふるあめりかに袖はぬらさじ」を執筆。港崎町は現在の横浜公園の辺り。

公園の一角に「岩亀楼」刻まれた石灯籠⑨が。また、横浜在住の山崎洋子（一九四四）の出世作「花園の迷宮」も港崎遊廓が舞台。開港期横浜が舞台の「横浜幻燈館・俵屋おりん事件帳」など、横浜ものを数多く執筆。

### ◆山本周五郎「季節のない街」

山本周五郎（一九〇二―一六七）は横浜市西前小学校を卒業し、昭和二十一年以降は終生横浜で過ごした作家。本牧問門町の旅館・問門町の離れを仕事部屋に。「季節のない街」には、小学生時代に暮らした西区の街並みを思わせる風景と、そこに暮らす庶民の表情が描かれています。

### ◆佐藤春夫「田園の憂鬱」

佐藤春夫（一八九二―一九六四）は大正五年四月、二十四歳のとき、妻と二匹の犬、二匹の猫を連れて中里村

（現・緑区鉄町）に転居。都会を離れた郊外で自分を見つけようと模索し、やがて出世作「田園の憂鬱」が誕生。鉄町の道路沿いに文学碑が。

### ◆直木三十五文学碑

「芸術は短く、貧乏は長し」と、生涯貧乏を友とした作家・直木三十五（一八九一―一九三四）らしい碑文（金沢区富岡東・慶理寺裏）が。直木賞の由来となった作家で、代表作は「南国太平記」「天城落城」など。

### ◆村上龍「テニスボーイの憂鬱」

人生の憂鬱を抱えながらテニスに打ち込む主人公。舞台は作者、村上龍（一九五二）の住む緑区を思わせる開発当初の郊外の乾いた風景が描かれています。他に、柳美里の「家族シネマ」「フラッシュバック」など、現代の横浜が舞台の作品が。

## 二 川崎

多摩川の清流に育まれた作家と詩人、  
その足跡を訪ねて郷愁の街へ。



昔懐かしさを感じさせてくれる多摩川の風景（二子橋近く）。

歌人・作家、岡本かの子の古里

東京都と神奈川県境を流れる多摩川を少し上った高津区に二子橋があり、橋のほとりの二子神社境内に、岡本太郎が母かの子のために作った文学碑があります。通常の文学碑の常識を破った、高さ四メートルのユニークな碑は河畔を歩く人の目を引きつけます。

傍らの副碑には亀井勝一郎の文で、川端康成の書により、

「旧家の血筋と多摩川の清流とは、かの子の生命に深く愛染し、作品のうちに多様な姿を

もって表現されている」

と刻まれています。次のかの子の歌にもその熱い思いがよくでています。

多摩川の清く冷くやわらかき水のこころを  
誰に語らむ

二子橋の手前に光明寺という古刹こくわうがありますが、その寺の前がかの子の家があったところ。かの子は明治二十二年生まれ、与謝野晶子に師事し、漫画家岡本一平と結婚しました。作品として処女作「鶴は病みき」のほか「生々流転しんじゅうりゅうてん」などがあります。

作詞家として有名な佐藤惣之助

もう一人、川崎の生んだ詩人・佐藤惣之助の歌謡碑が川崎駅前商店街の一角にあります。佐藤はこの碑のすぐ隣、川崎区砂子二丁目

明治二十三年誕生し、川崎小学校尋常科を出た後、住み込みの丁稚奉公ちやぢほうこうをします。この頃から句作を始め、雑誌の俳句欄への投句が認められ、選者であった佐藤紅緑さとうこうろくの弟子となりました。十代では句作に励むと同時にフランス語も学び、二十代で詩作に変わります。大正四年、処女詩集「正義の兜かぶと」刊行以後はほぼ毎年出し、二十二冊の詩集があります。

しかし、現在では詩人というよりも、歌謡曲の作詞家として知られています。前記の歌謡碑に刻まれた詞は「青い背広で」です。

青い背広で 心も軽く

街へあの娘こと行こうじやないか

赤い袴で ひとみも濡れる

若い僕等の いのちの春よ

昭和十二年二月、古賀政男作曲・藤山一郎



右/二子神社境内に息子の太郎が制作した岡本かの子の文学碑が、多摩川を見渡すように建っています。上/川崎駅近く建つ佐藤惣之助歌謡碑。



# 川崎文学散歩案内

本文中の①～⑧の所在地は概略図を参照。

## ◆岡本かの子「生々流転」

岡本かの子（二八八九—一九三九）は昭和初期を代表する女流作家です。多摩河畔の宿場町、二子の旧家・大買家の長女として誕生。最初は歌人として名が知られ、昭和十一年、「鶴



岡本かの子と、二子神社の境内に建つかの子の歌碑。

は病みき」で文壇にデビュー。ヒロインが多摩川の周辺を放浪する場面が強烈な印象を残す「生々流転」など、生まれ育った多摩川をモチーフ

にして壮大で神秘的な作品を創造しました。多摩川を望む二子神社①に息子の岡本太郎制作の文学碑があり、隣に歌碑が。「年々にわが悲しみは深くして、白筆の歌が刻まれています。また、かの子の評伝に瀬戸内晴美（寂聴）の「かの子撥乱」が。

## ◆佐藤惣之助と多摩川

一般的には歌謡曲の作詞家として知られる佐藤惣之助（二八九〇—一九四二）も多摩川にゆかりの深い詩人。「私の家は、川と麦の風の中から生れて来た」（「私の家」より）と記すように、多摩川河口の川崎で生まれ、馴れ親しんだ多摩川の風景を美しくう

歌で発表されたこの青春賛歌は同時に昭和の良き時代の終焉を告げるものでした。この年七月、日中戦争が始まり、わが国は急速に戦時体制へと変わっていきます。佐藤惣之助は昭和十七年五月、五十二歳で亡くなるまで、次のような多くの愛唱歌を作詞しました。「赤城の子守歌」「人生劇場」「新妻鏡」「男の純情」「人生の並木道」「湖畔の宿」等々。また、昭和三十六年生まれの若手作家・島田雅彦のいくつかの作品に多摩川周辺の団地が作者の原風景として出てきます。



## 概略図



## ◆国木田独歩「忘れえぬ人々」

「忘れえぬ人々」は、国木田独歩（一八七一—一九〇八）の初期代表作。漕ノ口にあった旅荘亀屋とその主人の話が、多摩川の風物とともに描かれています。亀屋は結婚式場・宴会場として最近まで営業。玄閑脇にあった独歩の碑も現在は高津図書館前庭④に。碑面には「歴遊の地を記念して国木田独歩にささぐ、昭和九年の夏島崎藤村」と刻まれています。

## ◆影向寺の詩碑



西脇順三郎詩碑。

奈良時代に創建された川崎最古の寺⑤。昭和十五年十月に西脇順三郎が来訪し、その記念の詩碑が境内に。「雲の水に映る頃、影向寺の坂をのぼる／薬師の巻毛を数へる秋。」

## ◆柏屋跡の碑

巖谷小波、北原白秋など多摩川に遊んだ多くの文人たちが訪れた江戸以来の旅館。跡地⑥には、巖谷小波の「小春日や日本一の腹加減」の句碑が。

## ◆庄野潤三「夕べの雲」

多摩丘陵（生田）に転居した主人公一家の暮らしを描いた庄野潤三（一九二一—）の代表作。その飄々とし



読売文学賞受賞の名作「夕べの雲」。

た味わいは多くのファンを魅了した。

## ◆春秋苑

柳田国男、山岡荘八、坪田譲治、平塚らいてう、尾崎士郎、横溝正史ら、たくさんの方々が眠る公園墓地⑦。尾崎士郎詩碑、武者小路実篤詞碑も。

## ◆王禅寺

奈良時代の創建と伝えられる古寺⑧で、境内には禅寺丸柿の原木があります。北原白秋や宮城二、柳田国男らが訪れています。



上／王禅寺。下／境内に北原白秋自筆の長歌「柿生玉の冒頭を刻んだ歌碑が。」

たい上げています。JR川崎駅近くに歌謡碑②が。

なお川崎市市民ミュージアム③に、岡本かの子、佐藤惣之助の原稿、筆墨、書画などの展示コーナーがあります。☎04475414500

## 鎌倉

古都の風情にひたりながら文士ゆかりの寺を歩く。  
路地の一角にも名作の香りが……。



鎌倉文学館。旧前田家別邸で、第十六代当主が昭和11年に改築した擬洋風の建物。

## 三島由紀夫「春の雪」の舞台

鎌倉文学館の春秋は女性客で賑わいます。展示物もさることながら、訪問客の目を奪うのは昭和初期の洋風木造建築と、そこからの眺望です。三段の傾斜地を巧みに生かした芝生の前庭の先はバラ園になっています。庭越しには鎌倉の町が拡がり、さらに目をやれば相模湾が陽光に輝いています。

加賀百万石で知られた旧前田侯爵家の別邸として建てられたこの建物は、三島由紀夫の「春の雪」の舞台となった別荘のモデルとして知られています。昭和六十年十一月から文学館として一般公開されて以来、大佛次郎・川端康成・高見順など鎌倉ゆかりの作家の資料を展示しています。

生前、旧前田邸を訪れた川端康成の住まいはすぐ近くにあり、名作「山の音」の中の、「風の音か、海の音か、耳なりかと、信吾は冷静に考へたつもりだったが、そんな音などしなかったのではないかと思はれた。しかし確かに山の音は聞えてゐた。」

という一節の「山の音」は、文学館や川端邸の裏山の音だったのかもしれませんが。

鎌倉文学館では毎日曜に、鎌倉の文学風土を紹介するビデオを公開放映しています。それを見てから目当ての地域を文学散歩するのが便利です。



鎌倉文学館入口の招鶴洞。



鎌倉は托鉢の僧が似合う街。若宮大路裏手の閑静な住宅地で、近くに旧大佛次郎邸が。



上ノ長谷の旧川端康成邸（現在は記念館にノ非公開）。右ノ甘縄神明社。名作「山の音」には、「信吾の家の裏手の神社のところを切れてゐる。その小山の端をひらいて、神社の境内になつてゐる。」と、甘縄神明社が出てきます。



## 鎌倉の海は出会いの場

鎌倉文学館からは、吉屋信子記念館を経て、高浜虚子きよこの居住跡を伝える虚子庵趾句碑を訪れます。そこで虚子の直筆を刻んだという、

波音の由比ヶ濱より初電車

の句を見て、江ノ電の線路を渡れば、海も間近です。

「鎌倉の夏の海」。

私はそう呟いただけでも、もう、恍惚としてしまふ。それは、眼で眺めた思い出ではない。手で触れた記憶でもない。全身、青い海に抱かれた皮膚の、心の、追憶なのである。」

右は太宰治に私淑した田中英光の「われは海の子」の一節。

この海は出会いの場所でもあったのです。

出会いといえば、夏目漱石の名作「こころ」でも、語り手の「私」と「先生」との出会いのシーンは鎌倉の海の近くでした。海から上がってきた「私」と、海へ入ろうとする「先生」が途中で知り合うのです。

鎌倉の海を愛した文人の中には、こんなふうに書いた詩人もいます。

「ぼくは鎌倉の魚の村を愛する。腰越、坂の下、小坪という漁村の名前を書くだけで、僕の目には、海の色の変化、潮風の匂い、そして海で働く男たち、老人と猫の姿が具象化されてくるのだ。」田村隆二「花の町 魚の村」

## 近代文学ゆかりの寺へ

北鎌倉駅に隣接する、鎌倉五山第二の禅刹ぜんしやく円覚寺は禅道の修行道場ですが、近代文学ゆ

## 山口瞳の「小説吉野秀雄先生」

今では伝説となつてしまつた「鎌倉アカデミア」は、終戦の翌年、材木座の光明寺に誕生し、わずか四年半で廃校となつた学校です。吉田健一、高見順、林達夫といった多彩な教授陣と、山口瞳、いずみたく、鈴木清順等々、生徒の方も一筋縄ではいかない面々が揃い、自由闊達な授業を繰り広げていました。

歌人の吉野秀雄も教授陣の一人。昭和歌壇に大きな足跡を残した生活派の歌人として知られていますが、そのユニークさは桁はずれ。山口瞳が書いた「小説吉野秀雄先生」には、そんな恩師の姿が愛情深く描かれています。

「先生の全体の印象は、偉丈夫である。益男である。大きな人である。容貌魁偉である。誰が見ても、一見して、尋常な男ではないと思つたらう。」しかし、「容貌魁偉であるけれど、それが同時に優しいのである。やわらかいのである。先生の前にいると、いつも春の日を浴びているように思われた。無限の抱擁力を感じた。」

吉野秀雄は、最初の夫人を亡くしたあと、詩人の八木重吉の未亡人と愛し合うようになりませんが、それが悪い噂になりました。生徒の人氣を嫉妬する教授からの理不尽な嫌がらせもありました。そんな

な時には、光明寺の裏山に登つて、「バカヤローツ」と叫び、学生たちには口癖のように、「恋をしなさい」という先生ですが、その生涯は病苦や貧乏との闘いでした。

晩年、病床で書いた随筆集「やわらかな心」が評判になり、これをきっかけに吉野秀雄ブームが起こりますが、このブームに手を貸したのも山口瞳でした。



光明寺の境内に建つ鎌倉アカデミアの碑。



帰源院山門。円覚寺の右手上の山にあり、漱石はここで参禅し、止宿。

かりの寺としても有名です。その二、三をあげれば、鳥崎藤村は自分の青春時代を描いた作品「春」で寺内の支院・帰源院に滞在した時のことを書いています。また、同じように支院の松嶺院では有島武郎が「或る女」の後編を執筆したこと

が知られています。

若き日の夏目漱石は参禅をするため円覚寺を訪れます。師から示された公案は、「父母未生以前本来の面目は何だか、それを一つ考えて見たら善からう」というもので、なんとか解答を出そうと苦しむが、遂にそれが解けず、「残念ですが、何うも仕方ありません。」と寺からすこすこと引き上げます。その経緯が代表作の一つ「門」に描かれています。

後年、再び帰源院を訪れた漱石は、佛性は白き桔梗にこそあらめと詠みます。この句は帰源院の庭に置かれた自然石に刻まれています。

松嶺院の墓所には中山義秀や開高健が眠っています。

# 鎌倉文学散歩案内

本文中の①～⑤の所在地は概略図を参照。

## 北鎌倉から市内へ

### ◆円覚寺と夏目漱石

臨済宗円覚寺派の総本山。境内には数多くの塔頭（禪宗で、祖師の塔のあるところ）があり、その一つ帰源院①に漱石が止宿し、参禅したのは明治二十七年暮れから翌年一月にかけて。その体験を漱石は「門」のなかに描いています。その前年には島崎藤村が止宿。また、川端康成の「千羽鶴」の冒頭に、「鎌倉円覚寺の境内にはいつてからも、菊治は茶会に行こうが行くまいかと迷っていた」とあります。茶室のモデルになったのは「仏日庵」です。



帰源院の本堂左脇に建つ漱石の句碑。



円覚寺の塔頭・仏日庵。

### ◆東慶寺と「駆込寺陸始末」

通称「駆込寺」として知られ、幕末までは縁切寺として幕府が承認していた尼寺②。ここを舞台にして書かれた時代小説が陸奥一郎（一九三〇―九五）の「駆込寺陸始末」。縁切寺は夫婦の縁切りだけではなく、この寺に駆け込んだ者は無縁になるという設定。幕府の権力の及ばない無縁

寺に駆け込むことができるかどうか、作品のハイライトになっている。寺内には高見順詩碑が。小林秀雄、高見順、田村俊子ほかの墓所。

### ◆立原正秋と鎌倉

立原正秋（一九〇六―八〇）は、昭和二十五年に鎌倉に移住。恋愛小説の名手として知られ、鎌倉を舞台に多くの作品を執筆。初期の代表作「薪能」は鎌倉宮が主な舞台。道ならぬ恋に生きる男女の滅びの美しさが、「残りの雪」には、葛原方岡の桜から化粧坂の紅葉、冬の腰越漁港など、古都の四季の風情や風物が描き出されています。昭和四十五年以降は梶原③に居住。墓所のある瑞泉寺には



建長寺の宝珠院近く。

### ◆建長寺とおせい茶屋

今も多くのファンが訪れます。

葛西善藏（一八八七―一九二八）が創作に専念するため妻子と離れて建長寺宝珠院④にやって来たのは、大正八年十二月。この時、三十二歳の葛西は、境内裏山近くにある茶屋（招寿軒）の娘ハナと出会い、互いに心を通わせるようになり、そのいきさつを執筆したのが「おせい」。彼女は、葛西の人生と文学に光明をもたらしたといわれます。茶屋は、その後「おせい茶屋」と呼ばれています。

佛次郎ほかの墓所があります。

### ◆平野屋

かつて鎌倉駅西口にあった料亭で、一部を避暑客のための貸間にしていました。当時名声を極めた芥川龍之介と無名の作家・岡本かの子が同宿。その時の様子を興味深く描いているのが瀬戸内晴美の「かの子撩乱」です。岡本かの子はここで関東大震災に遭遇。平野屋には多くの作家が訪れています。

### ◆鎌倉文庫

昭和二十年五月、戦況が悪化する最中、川端康成を始めとする鎌倉文士によって貸本屋鎌倉文庫が開店（場所は若宮大路）。書物を求める人々で連日大盛況。鎌倉文庫は戦後、出版社となり、雑誌「人間」や叢書「現代文学選」などを刊行しました。

## 概略図



### ◆里見諄「安城家の兄弟」

生まれは横浜ですが、自らを「鎌倉ツ子」と称していた里見諄（一八八八―一九三三）は、六年がかりで鎌倉を舞台とした自伝的長編「安城家の兄弟」を書き上げました。ここでは、

### ◆寿福寺と中原中也

敬愛する兄・有島武郎の情死事件を正面から取り上げています。里見は鎌倉で九十四歳の生涯を終えました。



扇ガ谷の里見諄・旧居。

「中原は、寿福寺境内の小さな陰気な家に住んでゐた。」と小林秀雄は「中原中也の思い出」の中に書いています。詩人中原中也（一九〇七―三七）が後に「評論の神様」といわれる小林秀雄の住む鎌倉にやって来たのは昭和十二年二月。この年十月に中原は結核性脳膜炎のため三十歳で病死しました。寿福寺⑤は高浜虚子、大

◆瑞泉寺

鎌倉随一の花の寺として知られる瑞泉寺⑥には、吉野秀雄、久保田万太郎、高浜虚子などの歌碑、句碑が建っています。「花の旅いづもの如く連立ちて」(虚子)。吉野秀雄、久米正雄、立原正秋の墓所。

◆釈迦堂口切通

永井路子(一九三二)の直木賞受賞作「炎環」は、北条一族や梶原景時など東国武士団の覇権をめぐるせめぎ合いを描いた連作。源頼朝の死後、北条時政が比企一族に襲いかかる場面に立ち、はだかるのが釈迦堂口切通⑦。



釈迦堂口切通。

材木座から腰越へ

◆鎌倉アカデミア

昭和二十一年五月、材木座の古刹・光明寺に鎌倉高等学校(のちの鎌倉アカデミア)が開校。鎌倉文士を中心とした教授陣によるユニークな教育が話題になりました(コラム参照)。その後、大船に移り、二十五年九月まで続きました。光明寺には記念碑⑧が。



光明寺の庭園。

◆材木座と作家たち

泉鏡花が、金沢から上京後、材木座の妙長寺にひと夏を過ごし、「みだれ橋」を執筆。久保田万太郎、久生十

蘭、長与善郎などが居住し、芥川龍之介もこの地で新婚生活を送っています。

◆由比ヶ浜と虚子庵

高浜虚子(一八七四—一九五九)は、明治四十三年から没するまでの五十年間を山比ヶ浜で暮らし、句誌「ホトトギス」の編集に専念。虚子庵は多くの俳人たちの集いの場に。居住跡⑨には句碑が。

◆鎌倉文学館

旧前田侯爵家の元別邸⑩。「吉葉に包まれた迂路を登りつくしたところに、別荘の大きな石組みの門があらわれ



文学館の窓から見る相模湾の景色。



◆極楽寺・稲村ヶ崎・七里ヶ浜



七里ヶ浜海岸。

極楽寺⑪ゆかりの作家は、中山義秀、大岡昇平など。稲村ヶ崎には、戦前は太宰治の弟子・田中英光が少年期を過ごし、野村胡堂が療養のために訪れ、戦後いち早く、中村光夫が移住。また、稲村ヶ崎公園⑫には「七里ヶ浜哀歌碑」が建っています。返子開成中学の生徒たちが遭難し、十二人の命が失われた事件は「真白き富士の嶺」として歌いつがれ、宮内寒弥は小説「七里ヶ浜」で取り上げました。



記念館はモダンな感覚の数寄屋風建築。

◆長谷と川端康成

正・昭和期の人気作家。二十歳の時に発表した「花物語」がベストセラーになり、その後、「良人の貞操」「安宅家の人々」など話題作を発表。没後、旧宅が記念館⑬として公開され、ふだんは主に女性の文化活動の場にご利用されています。●年4回、一般公開 / ☎04672270805



長谷寺山門。



小動岬。

◆小動岬と太宰治

太宰治(一九〇九—一九四八)が最初の心中事件を起こしたのは、昭和五年十一月二十五日。場所は小動岬⑭。東京帝国大学仏文科在学中で、この時女性(銀座のカフェの女給・田部あつみ、十九歳)は亡くなり、太宰は助かります。この事件を下敷きにして「道化の華」が書かれ、短編集「晩年」に収録。その後、太宰は、愛人・山崎富栄と玉川上水で情死したことはよく知られています。

## 三浦半島

逗子・葉山・  
横須賀・三浦

慈しむ愛、秘めた愛、許されざる愛……  
さまざまに愛のかたちに出会う旅。

## 横須賀から劔崎へ

かつては軍港として栄えた横須賀港から走水、浦賀を経て、長沢海岸へ向かいます。

しら鳥はかなしからずやそらの青海の

あをにもそますただよふ

と詠んだのは若山牧水です。牧水は大

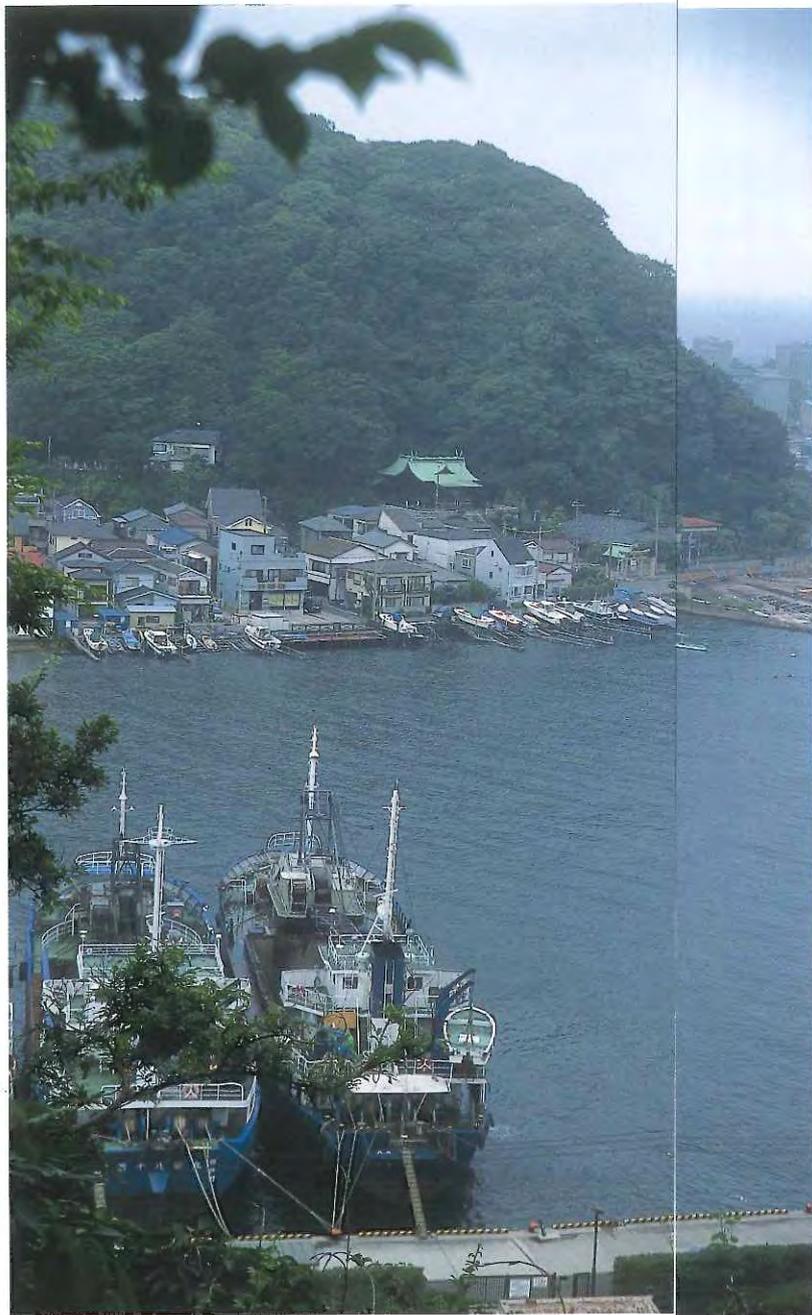
正四年三月中旬、病妻のため北下浦長沢に移転し、翌年十二月まで滞在。現在、海岸沿いの道路際に歌碑が建っています。さらに海岸線を南下すると畑の先端に劔崎の灯台が見えてきます。この灯台を借景とした小説に立原正秋の「劔ヶ崎」があります。

「劔ヶ崎。神奈川県東南、三浦半島の

突端にある岬角で、対岸の千葉県洲崎と相對して東京湾の入口に位置し、岬の頂上には灯台がある。ここは土地の人から、つるぎがさき、とは呼ばれず、けんさき、と呼ばれている。」

と紹介して物語を展開。立原はこの小説を通じて、自身の中にも流れる韓国人の血と、日本人としての生き方の難しさを

浦賀港。与謝野寛・晶子夫妻の歌碑のある愛宕山近くからの眺め。なお今年、日本に開国を迫ったペリー来航150年目にあたります。





三浦半島の突端の剣崎。立原正秋は「剣ヶ崎」で、韓国人と日本人の混血として育った複雑な少年時代を描いています。



城ヶ島の北原白秋詩碑。「雨はふるふる城ヶ島の磯に利休ねずみの雨がふる」と、白秋の自筆が刻まれています。



上／逗子海岸の磯辺・海中に建つ「不如帰」の碑。下／浪子不動。「不如帰」の碑を見下ろすように建つ堂宇で、正式には白滝山高養寺。

追求しました。波しぶきを上げる海岸から岬を見上げると、立原がここを舞台にして、寂しい少年時代を描いたことも、少し分かるような気がします。

### 城ヶ島から逗子へ

三浦半島の先端は北原白秋ゆかりの城ヶ島です。島には白秋詩碑と白秋記念館があります。

白秋は明治四十三年、隣家の人妻と知り合い、愛し合うようになりませんが、挫折と傷心のうちに三崎へ移転します。大正二年、家族とともに三崎の向ヶ崎に移転してきた家はフランス人が建てた家で、海がよく見えたということ。 「城ヶ島の雨」は、この家から対岸の城ヶ島を

見て生まれました。この詩は、島村抱月の芸術座から依頼されて作詩したもので、梁田貞が作曲し、奥田良三が歌って全国に流行、城ヶ島の名が知られるようになりました。

森戸海岸から逗子へ向かうと、途中に日影（旧・日蔭）茶屋があります。ここは大正五年十一月、「青轡」の記者、神近市子が伊藤野枝と投宿中の大杉栄を刺傷するという、日蔭茶屋事件の舞台となった場所です。瀬戸内晴美の「美は乱調にあり」がこの事件に触れています。

国道二三四号線で逗子海岸を走ると、不如帰の碑が海中に立っているのが目に入ります。この碑は昭和八年に徳富蘇峰の揮毫で建てられたものですが、いうまで

もなく弟、徳富蘆花の書いたベストセラー小説「不如帰」を記念したもの。碑とは国道を挟んで反対側にある高養寺の白滝不動はこの漁師の信仰を集めていますが、「不如帰」の本が出てからはヒロインの名をとって「浪子不動」と呼ばれるようになりました。

蘆花は明治三十年から三十三年まで、逗子の柳屋に間借りしますが、たまたま同宿した大山巖・陸軍元帥の元副官の未亡人から、元帥の娘信子と三島子爵の息子弥太郎との結婚が信子の結核で破談となった話を聞いて「不如帰」を書いたといわれます。高浜虚子はこの小説を読んで、「小説に涙を落とす火鉢かな」の句を手紙のなかに書いて作者に送りました。

# 三浦半島文学散歩案内

本文中の①～⑫の所在地は概略図を参照。

## 横須賀から三浦へ

### ◆横須賀ゆかりの作家と作品

芥川龍之介は東大英文科を卒業して一時、海軍機関学校の嘱託教官として横須賀に勤務。「保吉の手帳」などに横須賀時代の描写が。他に、宇野浩二「軍港行進曲」、牧野信一「緑の軍港」など。戦後は、大岡昇平「愛



観音崎灯台。

### ◆観音崎灯台

「べに椿岬の山にうづだかし路より見えすうへの灯台」(寛)、灯台の中柱撫で思へらく岬の風も弾くにたらん(晶子) など与謝野寛(鉄臂・晶子大妻をはじめ、多くの歌人、俳人のモチーフに。小説では堀田善衛の



寛・晶子夫婦歌碑。

「燈台へ」、松本清張「球形の荒野」の舞台に。観音崎公園①には高浜虚子句碑、西脇順三郎文学碑。浦賀港を見下ろす愛宕山公園にも、寛・晶子夫婦歌碑②があります。

### ◆牧水・喜志子歌碑

「初めてこの漁村に汽船からおりた時、私は実際椿の花の多いのに驚いた。」(若山牧水「旅とふる郷」から。若山牧水(一八八五―一九二八)は、大正四年三月から一年十カ月の間、歌人でもある妻・喜志子の療養のために北下浦長沢を訪れ、「砂丘」「朝の歌」などを創作しています。海岸には牧水の「しら鳥はかなしからずや」の歌碑③が立っていますが、この作品



牧水・喜志子歌碑。

は、牧水の二十二歳の時のもの。北下浦海岸の歌ではありません。

### ◆三浦ゆかりの二人の作家

「剣ヶ崎」は「新能」と並ぶ立原正秋の初期の代表作。大正十五年、朝鮮慶尚北道で生まれ、幼い頃に父が自殺。その後、横須賀の母の再婚先で少年期を過ごした作者の自伝的作品で、観崎④が舞台に。また、葉山に別荘をもつ曾野綾子の作品(「神の汚れた手」「海のある町」など)には、現代の三浦半島の素顔の部分が描かれています。



逗子・岩殿寺の泉鏡花碑。

概略図  
mura peninsula

## 北原白秋と城ヶ島

早くから詩才を認められ、処女歌集「邪宗門」の成功で一躍詩壇の寵児になった北原白秋(一八八五―一九四〇)は、写真家松島長平の妻俊子(のちに白秋と結婚)との恋愛スキャンダルに傷つき、大正二年五月から約九カ月、三崎に移住。この間作った十一冊に及ぶ創作ノートから名作「雲母集」が生まれ、「城ヶ島の雨」が誕生、



三崎に移住した白秋が一時期暮らした見桃寺にある歌碑。

白秋の転機となりました。「雲母集」の中の一首、「夕されば涙こぼるる城ヶ島人問ひとり居らざりけり」には、当時の詩人の孤絶した心境が表れています。「城ヶ島の雨」の詩碑⑤の前には白秋記念館⑥があり、白秋の三崎時代を偲ばせる資料が展示されています。●月曜休館/無料/☎0468-816414



北原白秋と「雲母集」箱

返子、葉山

◆樋口大聖と「葉山の富士山」

訳詩集「月下の一群」で知られる詩人樋口大聖（一八九二―一九八二）は、昭和二十五年、四十七歳の時に一家で葉山町に移住。近くの森戸海岸は散歩コースで、ここから眺める富士山をこよなく愛し、詩作しています。詩集「夕の虹」「月かげの虹」「消えがての虹」などを次々と発表。自ら「虹の屋主人」と称していました。森戸神社境内に詩碑が。



葉山の日影茶屋。

川上眉山の「ふところ日記」、久米正雄の「破船」の舞台にも。

◆柳屋の独歩と蘆花

国木田独歩は佐々城信子と結婚し、明治二十八年十一月、返子の旅荘・柳屋で新婚生活を始めますが、わずか五カ月で破局。その真相は日記「欺かざるの記」に。その後、明治三十年一月からは徳富蘆花が妻愛子と滞在し、この時、同宿の福家安子から聞いた話をもとに「不如婦」を執筆し、ベストセラーに。柳屋跡には独歩と蘆花の文学碑が。また、「不

如婦」のヒロインの名をとった浪子不動⑩が返子海岸の北岸部にあり、すぐ前の海中に「不如婦」の碑が建っています。

◆蘆花記念公園と返子市郷土資料館

田越川左岸の丘の上に蘆花記念公園⑪が設けられ、九十九折りの坂道の随所に蘆花の小説「自然と人生」の一節を記した立札が。園内には返子市郷土資料館があり、返子ゆかりの作家の文学資料を展示。●月曜 祝日の翌日休館 / 有料 / ☎0468-731-741



返子市郷土資料館。



岩殿寺境内。

◆岩殿寺と鏡花

泉鏡花（一八七三―一九三九）は持病の療養のために神楽坂の芸妓桃太郎（姉系図）のお駕のモデルで本名（すゞ）と二度返子に滞在。岩殿寺⑫の観音堂を舞台に魔界の世界を描いた「春昼」「春昼後刻」を、秋谷の長者館を舞台に幻想譚「草迷宮」を執筆。また、すゞとの結婚を反対していた師尾崎紅葉亡きあと、二人は正式に結婚し、この顔末を「姉系図」に記し、これは新派劇の「湯島の白梅」になりました。

石原慎太郎と三浦・湘南の海

石原慎太郎の「太陽の季節」は昭和三十一年に芥川賞を受賞し、単行本も当時としては三十万部という超ベストセラーとなり、映画化されて、石原裕次郎という大スターを生み出しました。無名の学生作家の作品が社会現象として騒がれたのは、「日本文学史上空前」の出来事といわれます。

作品の内容については賛否両論。「この頃よく街で見掛ける一群の青年の言行が胸が悪くなるまでに克明に写した作品である。」（吉田健一）といった否定派と、「この二三年間に現れた若い作家の中でも際立った地位を得る人ではないか、と

思う。」（伊藤整）という肯定派の二つに割れました。

しかし、両派ともに、問題にしたのはいまだきの若者風俗についての新鮮さや驚きでした。もちろん作者の意図は、「価値素乱者」としての若者の行為を描くことでしたが、その舞台として必要だったのが湘南の海とヨットです。同じ頃に書かれた「ヨットと少年」や「黒い水」は、海に対する作者の憧憬や、海をモチーフにして性と死といったテーマがストリートに描かれています。

また、平林たい子賞を受賞した「生還」では、突然末期癌を宣告された男の壮絶



森戸海岸に建つ石原裕次郎記念の石神と「太陽の季節」表紙。



な死闘の舞台として三浦市の小網代湾が選ばれています。ちなみに小網代湾は、作者がヨットレースに参加する時のホーム・ポートです。

石原文学のライト・モチーフが海とヨットであり、作品の多くが三浦や湘南を舞台にしていることは、近作「弟」に至るまで変わることはありません。

## 湘南

藤沢・茅ヶ崎・  
平塚・大磯・二宮潮風と陽光に包まれた海辺の町で、  
いのちを見つめた作家たち。

## 別荘地と療養の地

茅ヶ崎には国道一三四号線からちよつと入ったところに、「裸の王様」で芥川賞作家となった開高健の記念館が今年開館されました。記念館は開高健が昭和四十九年ごろから仕事場として使い始め、その後、家族たちと暮らした建物です。玄關脇に表示された「悠々として急げ」の文字が印象的です。

茅ヶ崎の海岸に立つと相模湾に接する湘南の市や町が見渡せます。明治以後、

小田原・二宮・大磯・藤沢などは別荘地として発展しましたが、茅ヶ崎・平塚は療養の地として有名になりました。

茅ヶ崎には最盛時、東洋一といわれる規模を誇った結核療養所・南湖院があり、国木田独歩は明治四十一年、二月から六月までここに入院、人生最期の生活を送りました。

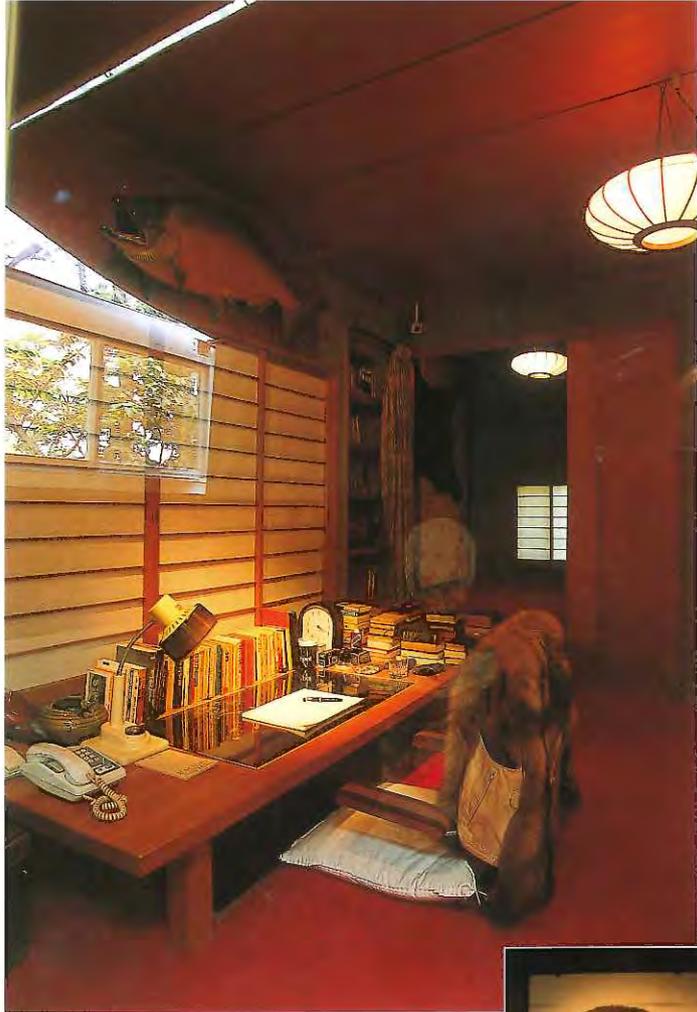
平塚の杏雲堂病院結核療養所は南湖院に先だって開設された療養所ですが、明治の文学者・高山樗牛が入院したのは明治三十五年十月です。同年十二月、三十

二歳で病没しました。現在、病院の道路に面した土堤に、元平塚市長・戸川貞雄の文による碑が建ち、副碑には、樗牛が文部省から美学研究のためヨーロッパ遊学を命ぜられながら病に罹り、渡欧の夢を果たせずに終わったことが記されています。

明治文壇に足跡を残した樗牛の小説「瀧口入道」、随筆「わが袖の記」などは、今でも一部の愛好家に親しまれています。その樗牛の隣には有島武郎夫妻ゆかりの碑が建っています。



開高健は晩年の16年間、茅ヶ崎に居住。今年4月より、仕事場兼住居が記念館として公開。



白樺派の作家などが逗留した鵠沼海岸の旅館・東家の跡。道路脇に記念碑が。



大磯の旧島崎藤村邸「静の草屋」。  
藤村は最晩年の2年半余りを執筆活動のうちに過ごしました。  
下は相模湾の風景（袖ヶ浦近く）。

「涼しい風だね」の言葉を残して…

大磯駅を出ると右手に「海内第一避暑地」の碑があります。明治四十一年、日本新聞社が国内で避暑地百選の全国投票を募った時、大磯が第一位に選ばれたのを記念して建てられたのがこの碑です。

大磯駅から旧東海道へ出る小路の傍に島崎藤村夫妻が永眠する地福寺（まふくじ）があります。

すが、生前この寺の梅を愛した藤村にちなんで、有島生馬の筆による「島崎藤村墓」と刻まれた墓碑の上に、梅の木が枝をひろげています。

旧東海道を小田原方面へ十分ほど歩けば裏道に藤村が晩年を過ごした家があります。藤村はこの家で大作「東方の門」を執筆中倒れました。昭和十八年夏「涼しい風だね」が最後の言葉でした。

そして、この年に大磯に転居してきたのが高田保（たかたけ）です。

高田は昭和二十四年から藤村邸に移り住み、ここが終（つい）の住みかとなりました。彼の名著「プラーリひょうたん」は、その大部分が藤村の旧居で書かれたのでしよう。高田の墓は、相模の海を見はるかす大磯の高台に設けられた高田保公園の最奥にあります。



右/平塚市袖ヶ浜の杏雲堂病院脇に建つ高山樗牛碑。多くの作家が病と闘い、文学作品のモチーフにもなりました。  
下/病院入り口。



# 湘南文学散歩案内

本文中の①～⑨の所在地は概略図を参照。

## 藤沢、茅ヶ崎

### ◆「百鬼の都」江の島

明治二十三年に横浜に着いたラファディオ・ハーン（のちの小泉八雲）は、江の島を訪れ、「まさに百鬼の都だ」と「日本暫見記」で絶賛。また、尾崎紅葉は「江嶋上産滑稽貝屏風」に江の島を、戦後の江の島の旅館に「出稼ぎに来た番頭たちの生霊をユーモラスに描いた作品に井伏鱒二の「駅前旅館」があります。

### ◆鵜沼海岸と東屋

大正から昭和にかけて、鵜沼の旅館・東屋（東家）に、武者小路実篤、

## 平塚、二宮、大磯

### ◆杏雲堂病院

明治二十九年に平塚に開設され、現在まで約百年の歴史をもつ病院④。高山樗牛や有島武郎の妻安子は病と闘い、ここで死去。病院脇に樗牛碑があり、左手には有島武郎夫妻由縁の碑が。また、駅近くの公園には、小説仕立ての料理読本「食道楽」の著者、村井弦斎の碑があります。

### ◆中勘助「しづかな流」

「銀の匙」の著者、中勘助（一八八五—一九六五）は大正十三年から八年間平塚西海岸に居住し、この地を舞台に随筆「しづかな流」を執筆。

### ◆鴨立庵

「心なき身にも哀れは知られけり鴨立

志賀直哉、宇野浩二、芥川龍之介ら多くの文人が逗留し、「鵜沼文人村」といった趣が。跡地に表示①のみ。芥川はのちに「鵜沼雜記」を執筆。鵜沼ゆかりの作家、阿部昭の「千年」は戦後の変わりゆく鵜沼が舞台。

### ◆旧南湖院

南湖院②は茅ヶ崎市にあった結核療養所。国木田独歩や詩人の八木重吉、大手拓次らが入院し、逝去。東に一・五五ほど離れた茅ヶ崎市営球場の土手に、国木田独歩詞碑が。



国木田独歩詞碑。



西行法師ゆかりの俳句道場、鴨立庵。

沢の秋の夕暮」と西行法師が歌を詠んだ庵といわれる、わが国の三大俳句道場の一つ⑤。●無休／有料／☎04636116926

### ◆旧島崎藤村邸

島崎藤村（一八七二—一九四三）は、「破戒」「夜明け前」で知られる作家。晩年、大磯に居住。同町東小磯に旧居⑥があり、見学可。●月曜休／無料／☎04636114100

### ◆高田保公園

劇作家の高田保（一八九五—一九五〇）は、藤村亡き後の家に住み、名随筆「フアリひょうたん」の大部分を執筆。

### ◆城山三郎と湘南

「湘南海光る窓」は、△海の見える家に住みたい」というのが、私の長い間の夢であった（冒頭）という著者が夢をかなえて、茅ヶ崎の海と風俗について書いたエッセイ集。

### ◆茅ヶ崎市開高健記念館

開高健（一九三〇—八九）は、昭和四十九年より茅ヶ崎市東海岸南に仕事場を設け、移住。没後、自邸が記念館③に。喜斎もそのまま、自筆原稿や愛用品などを展示。代表作に「パニック」「輝ける闇」「夏の闇」など。●金・土・日と祝祭日開館／無料／☎046718710567

死後、坂田山の中腹に自分の名を冠した公園が造られ、自筆の文学碑⑦が建っています。

### ◆徳富蘇峰記念館

徳富蘇峰は平民主義を唱えた思想家で、作家・徳富蘆花の兄。代表作をはじめ、遺稿、蔵書など約三万点を取蔵、展示⑧。●月・水・金開館／有料／☎04637110266

### ◆「ガラスのうさぎ」像

「ガラスのうさぎ」は、無名の主婦だった高木敏子が過酷な競争体験をつづった作品。二宮駅南口広場前に記念のプロンズ像⑨が。



高田保墓碑。隣に文学碑が。



「ガラスのうさぎ」像。

## 概略図



# 六 小田原

北原白秋、谷崎潤一郎、太宰治等々、  
ここは、文豪たちが「青春」を過ごした町。

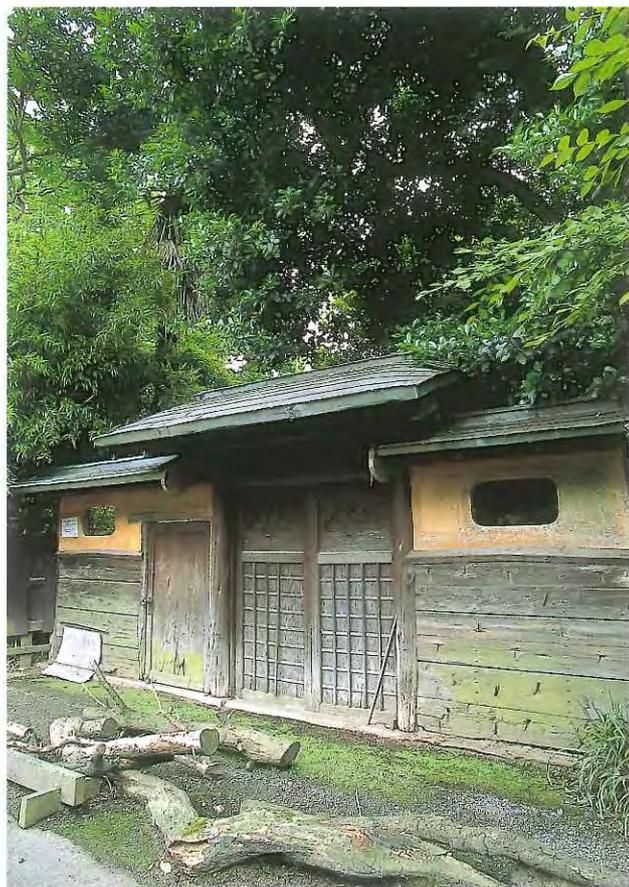
名作「斜陽」の舞台となった家

東海道線を国府津で乗り換えて御殿場線の最初の駅が下曾我駅です。歩いて十分ほど、城前寺の近くに「斜陽」の舞台となった大雄山荘があります。

太宰治の代表作となった「斜陽」は昭和二十二年、太宰三十八歳の時、大雄山荘に太田静子を訪ね一週間ほど滞在したあと、田中英光が疎開していた伊豆の三津浜へ行って書き始められました。当初は雑誌「新潮」に連載され、同年十二月、単行本となりました。



宗我神社入り口近くに建つ尾崎一雄碑。「虫のいろいろ」から富士山の眺望を描いた二節が。



大雄山荘。太宰治が疎開先の愛人・太田静子を訪ねた家。

「斜陽」の登場人物、直治には青年時代の太宰の姿が、同じく上原には壮年時代の太宰の姿が投影されていると考えられますが、二人の頼りない男に決別し、自らの意志で子供を生み自立していかうとする女性の姿を描いた、この作品は少しも古くなっていません。

「こいしいひとの子を生み、育てる事が、私の道徳革命の完成なのでございます。あなたが私をお忘れになっても、また、あなたがお酒でいのちをお無くしになっても、私は私の革命の完成のために、丈夫で生きて行けうです。」

「斜陽」の結末部、主人公の言葉が女性の強靱さを強調して印象的です。

曾我の梅と富士を愛した作家

尾崎一雄は明治三十二年、三重県に生まれ、同四十一年、父の郷里の小田原市曾我谷津に帰ります。神奈川県立第二中学校（現在の小田原高校）を卒業。同級生には、のち政治家の河野一郎がいました。この頃から文学へ志し、昭和二年、早稲田大学卒業。父没後の生活は貧しいものでしたが、昭和十二年、「暢気眼鏡」で第五回芥川賞を受賞、作家としての地位を確立します。病気のため一時は危険な状態になりますが、下曾我の環境に助けられたのか健康を回復します。昭和三十七年には「まぼろしの記」で野間文芸賞、三十九年



西海子通り一角にある白秋童謡館。大正13年に建てられた純和風の家屋。

多くの著名人が住みました。幕末から明治時代を通して活躍した伯爵・田中光顕もこの地に別邸を建てました。西海子通りに面した南欧風の洋館と、庭を間にして後方に建つ日本家屋がその建物で、洋館は現在、小田原文学館となつて、小田原ゆかりの文学者を紹介しています。日本家屋の方は白秋童謡館となつて北原白秋に関する資料が展示されています。白秋が東京から小田原に移ってきたのは大正七年で、大正十五年、東京へ戻るまで約八年間をここ西湘の地に過ごしました。小田原時代の白秋は彼の作品活動の最盛期で、当時作詩された童謡には「からたちの花」「この道」「ベチカ」等々の名作があります。文学館周辺には、谷崎潤一郎、三好達治、坂口安吾、岸田国士、北条秀司などが居住。



北原白秋、谷崎潤一郎などが住んだ西海子通り(小路)。右は、川崎長太郎が生まれ育った浜町の一角。



に日本芸術院会員、五十三年には文化勲章を受けました。死去したのは昭和五十八年三月です。宗我神社入口の文学碑は、八十一歳のとき建てられたもの。碑文は「虫のいろいろ」の一節で、こう記されています。「富士は天候と時刻とによって身じまひをいりるにする。晴れた日中のその姿は平凡だ。真夜中、冴え渡る月光の下に、鈍く音なく白く光る富士、未だ星の光が残る空に、頂近くはバラ色、胴体は暗紫色にかがやく暁方の富士。」

**西海子通りと、その周辺**

小田原城の箱根口から海の方へ入ったところに西海子通りという桜並木の静かな通りがあり、明治から昭和初期には別荘地として、

# 小田原文学散歩案内

本文中の①～⑦の所在地は概略図を参照。

## 小田原ゆかりの作家たち

### ◆村井弦齋「食道楽」

明治三十五年、村井弦齋（一八六三—一九二七）は、西海子通りの一角に居住し、ここで報知新聞での連載「食道楽」を始め、一躍有名に。

### ◆北原白秋と文人交遊

大正七年三月に北原白秋が小田原に移住。伝肇寺①本堂裏の敷地を借りて茅葺きの家（木兎の家）を造り、九年には赤い瓦葺きの洋館を新築。この間、二度目の妻章子と離婚し、大正十年四月にはアララギ派の歌人だった佐藤菊子と再婚。ようやく落



木兎の碑（伝肇寺）。

ち着いた暮らしを取り戻し、創作面でも童謡を多作するなど、充実した日々を過ごします。

白秋の世話で谷崎潤一郎が小田原に転居。妻千代をめぐり佐藤春夫との間で有名な「小田原事件」が起こります（コラム参照）。その他、小田原ゆかりの作家・詩人・歌人に、坂口安吾、三好達治、川田順、劇作家の北条秀司や岸田国士などがいます。

### ◆大宰治と「斜陽」の家

愛人太田静子が疎開していた曾我谷津の大雄山荘に大宰治が滞在し、このとき身ごもった子供が「斜陽の子」といわれた太田治子。大宰が静子の日記をもとに「斜陽」を執筆したことはよく知られています。

## 小田原出身の作家たち

### ◆天折の天才・北村透谷

小田原唐人町（現・浜町）に生まれた北村透谷（一八六八—一九四）は、代々小田原藩上を務めた家系。幼い頃に東京に移住。自由民権運動で挫

折したあと、「蓬萊曲」などの浪漫的な作品を発表しますが、神経衰弱のため二十六歳で死去。浜町に生誕之地碑③が、小田原城址に記念碑④があります。

### ◆牧野信一の幻想世界

牧野信一（一八九六—一九三六）は、小田原町緑（現・栄町）で生まれ、大正期文壇にデビュー。小田原の田園風景を異国の地に見立てて、夢と幻想あふれる小世界を描き出しました。「ゼーロン」「鬼沢村」など。小峰排水地東⑤に文学碑が。

### ◆尾崎一雄と下曾我

尾崎一雄（一八九九—一九三三）の家は代々下曾我の宗我神社の神官。早稲田大学在学中から文学に打ち込み、昭和十二年に「暢気眼鏡」で芥川賞を受賞。しかし、体をこわして帰郷

## 小田原文学館／白秋童謡館

江戸時代には武家屋敷が立ち並んでいた南町界隈。中でも多くの文士たちが暮らしたのが西海子通り周辺で、通りに面した敷地内に小田原ゆかりの作家たちの文学資料を展示する小田原文学館と白秋童謡館②があります。和洋の対照的な建物が美しく、庭園も趣があります。●年末年始のみ休館／有料／☎04651-2219881（小田原文学館）



小田原文学館

してからは、自宅の付近（曾我谷津）の自然を素材にした味わい深い作品を執筆。一虫のいろいろ「まぼろしの記」など。宗我神社に碑が。

### ◆川崎長太郎と抹茶町

川崎長太郎（一九〇—一八五）は、小田原町万年（現・浜町）生まれ。中学中退後、上京して徳田秋声門下になり、「余熱」が芥川賞候補に。昭和十三年に帰郷し、実家近くにトタン作りの物置小屋を建て、以後二十年余り執筆に専念。抹茶町の女性たちとの交流を描いた作品が注目を浴びました。居住跡に小屋跡碑⑥があり、早川観音⑦に文学碑があります。



川崎長太郎小屋跡碑（御幸ノ浜）。



## 概略図 odawara

牧野信一の墓所のある清光寺。墓裏に久保田万太郎の撰文が。

文壇を揺るがした「小田原事件」

谷崎潤一郎が妻千代を佐藤春夫に譲り渡すという出来事は、大正・昭和の文壇史を彩る有名な事件になりました。

事の起こりは、潤一郎が妻の妹で女優の卵だった石川せい子を好きになったことでした。

谷崎が千代と結婚したのは大正五年、翌年、長女鮎子が誕生。谷崎はこの頃すでに文壇の偉才として一目置かれる存在でした。だが、二人の結婚には最初から問題がありました。谷崎は、千代の姉で向島の芸者だった初子に憧れていましたが、なぜか妹の千代と結婚し、まもなく千代の妹のせい子を好きになります。谷

崎は千代を嫌っていたわけではありませんが、貞淑でおとなしい千代がものたりずに、奔放で妖婦型のせい子に惹かれ、結婚を考えるようになります。

このような事情を抱えて大正八年十二月に一家は小田原に転居。そこで、当時たびたび谷崎家を訪れていた佐藤春夫と千代は互いに愛情をもつようになり、これを知った谷崎は妻の譲渡を佐藤春夫に申し込み、佐藤もこれを快く受け入れます。しかし、いったんまとまった話でしたが、谷崎との結婚をせい子が拒否したことから白紙撤回となり、佐藤は谷崎に絶交宣言をします。これが「小田原事件」



県立近代文学館の谷崎潤一郎コーナーと「痴人の愛」箱

と呼ばれます。

結局、谷崎と佐藤が和解し、春夫と千代が結婚するのは十年後の昭和五年のこと。谷崎は、この事件の後、関西に移住し、せい子をモデルに「痴人の愛」の執筆にとりかかり、従来の悪魔主義的な作風を脱し、押しも押されもしない文壇の大御所となってゆきます。

七  
真鶴・湯河原

万葉集にも歌われた西湘の楽園で、  
溪流沿いを散策し、文学と親しむ。

一幅の絵のような海の眺め

真鶴半島の先端に、

わが立てる真鶴岬が二つにす相模の海と伊

豆の白波

と刻まれた与謝野晶子歌碑が建っています。

湯河原には地元の実業家・有賀精の営んでいた山荘風の洒落た旅館・真珠荘があり、宿主の款待を得て、ある時は同人たちと、またある時は夫寛と、そしてある時は親しい女友達と、というようにしばしば真鶴や湯河原を訪れました。真珠荘の庭の大島桜は晶子が特

に愛したもので、晶子の死後、その木の下に夫寛と妻晶子の連理歌碑が建てられました。

光りつつ沖を行くなりいかばかり

たのしき夢をのする白帆ぞ

吉浜の真珠の荘の山ざくら

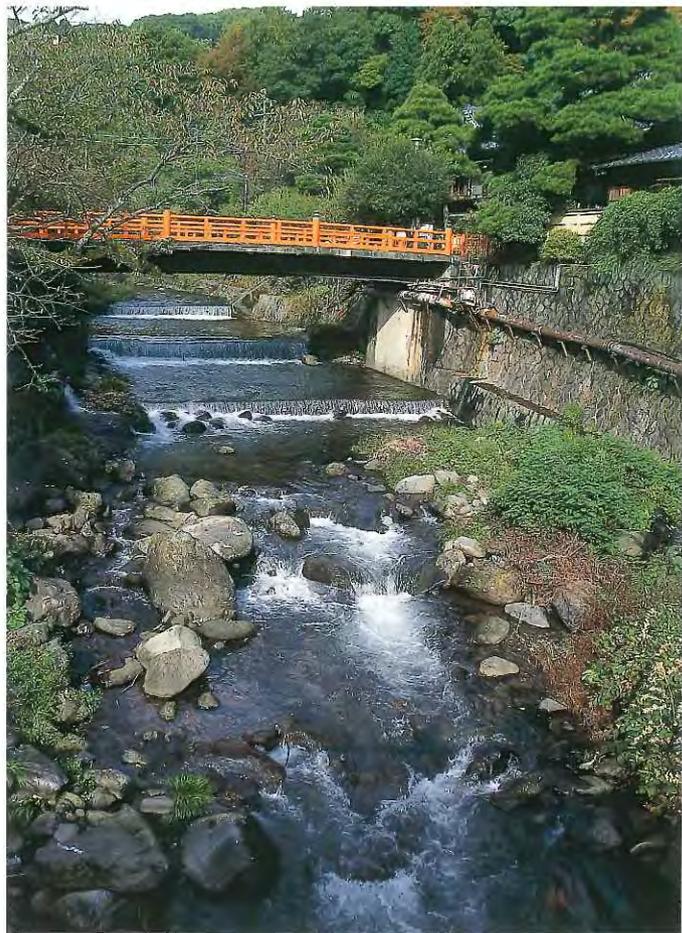
島にかさなり海にのるかな

晶子

その真珠跡地の隣にあるのが谷崎潤一郎最終の住み家となった湘碧山房です。現在はある会社の寮となっていますが、玄関の横には元文部大臣・安部能成の筆になるといわれる「湘碧山房」の額が懸かっています。若干の手直しはされているようですが、全体的には



真鶴岬には、真鶴の自然や景観を詠んだ歌碑、句碑が数多く点在しています。



夏目漱石が晩年、二度ほど逗留した天野屋旅館。現、湯河原ゆかりの美術館の前に架かる橋



湯河原は多くの文人墨客が訪れた町。昔からの温泉町の風情が残っています。



上/湘碧山房。谷崎潤一郎のついの住処となった家。下/真珠荘跡の与謝野寛・晶子の夫婦歌碑。

### 万葉公園を歩く

谷崎が居住していた当時の姿を保っているといわれ、南急斜面に建てられた家の庭から眺める西湘の海の眺めは一幅の絵を見るようです。

導助言を受けて、地元の人たちが藤木川と千歳川の合流する辺りの傾斜地に作った万葉公園があります。公園入り口近くには与謝野寛・晶子夫婦歌碑があり、

湯ヶ原の溪谷に向つた時は／さながら雲深く分け入る思があつたと記された国木田独歩の碑もあります。千歳川の渓流沿いに作られた「文学の小径」には、湯河原の地に遊び、思索し、あるいは

在任した文人たちの歌句が道沿いに掲出されています。たとえば、

道はたの墓なつかしや冬の梅 芥川龍之介  
この句は、芥川が好意をもつた未亡人で歌人の片山広子への手紙の中に書かれた句です。湯河原の旅館・中西屋から出状されました。

一生一瞬に去来すもすの声 山本有三  
山本有三は昭和二十八年から亡くなった四十九年までの約二十年余り、湯河原に在住しました。当時の山本は近衛文麿の伝記執筆の頃で、この句にも山本の近衛観が窺えます。

ただひとり湯河原に来て既に亡き独歩を思ふ秋の夕暮れ 吉井 勇

一読、国木田独歩の追慕の歌と分かります。藤木川を遡ると、夏目漱石の最後の作「明暗」の舞台となった天野屋旅館が。

51 — 真鶴・湯河原



## 芥川龍之介「トロッコ」創作秘話

「小田原熱海間に、軽便鉄道（けいべんてつどう）の工事が始まったのは、良平の八つの年だった。」

芥川龍之介の「トロッコ」の冒頭の一節です。トロッコとは土を運ぶ手押し（ておし）の運搬車のこと。良平は、その工事を何度となく見物に行き、一度でいいからトロッコに乗りたい、乗れないなら、せめて押したいと思います。そして偶然にもその機会が訪れます。若い二人の土工（どこう）が乗せてくれたのです。傾斜地を登るときは手で押し、下るときには、すべるように走るトロッコ。景色はどんどんと変わり、いつの間にか日暮れが近づいてきました。すると土工から「われはもう帰んな。お

れたちは今日は向う泊りだから」と突き離され、良平は見知らぬ町で一人取り残される不安に襲われます。

このあと、腹を空かし、泣きながら帰る少年の姿を、作者は昔の思い出として描いてゆきます。見かけは片々たる短編ですが、室生犀星は、「トロッコ」という物象にまつわる記憶を描いて、それを徐々に人生の象徴へともってゆき、最後に現在の心境に仮託させる」その見事な手腕を絶賛。

しかし、この小説に描かれた少年の思い出は芥川自身のもではありませんでした。湯河原百浜出身の力石平蔵という



人車鉄道・軽便鉄道の小田原駅跡の石碑(国道1号線)。

作家志望の青年が書いた習作を、芥川が書き直して発表したもの。芥川に私淑していた力石でしたが、「トロッコ」が発表され、そのあまりの評判のよさに、がっかりしたといえます。もはや、「トロッコ」は、自分の思い出から離れてしまった寂しさを感じたのでしよう。ちなみに「一塊（いっかい）の土」も、力石平蔵が素材を提供した作品でした。

## 八

## 箱根・県央

津久井から大和・厚木・秦野へ至る地域

「物語」が生まれた宿に泊まり、古き良き時代へタイムスリップ。

## 古き良き時代の風情を残す宿

古くから西と東を結ぶ交通の要衝（ようしゅう）だった箱根は、歴史小説や時代小説の舞台としてたびたび登場しています。

「箱根の険を越え、一挙に小田原城を落としたり明応四年（一四九五）、早雲六十四歳の秋である。」（司馬遼太郎「箱根の坂」より）

早雲は小田原城奪取ののち、二十数年後に世を去り、湯本の早雲寺に祀られました。

江戸時代に入ると「箱根七湯」が有名になります。池波正太郎の「剣客商売」の中の一

篇「箱根細工」は塔の沢が舞台。秋山大治郎が湯本を訪れるシーンを紹介しましょう。「……湯本にたちならぶ湯宿の軒先をすぎ、歩みをすすめるうち、いつの間にか右側の塔の峰、左側の湯坂山が道にせまって、ひんやりとした山気が大治郎の汗をたちまち吹きはらった。」

大治郎は山間の湯場の雰囲気（ゆば）に心を和ませますが、この後、「箱根の温泉は、奈良時代の万葉集の歌にも詠（よ）まれているほどに、古くから知られているが、塔の沢の湯は江戸時代初期に発見されたもので、そのころ、かの黄



早川の溪流沿いに建つ環翠楼は、皇女和宮ゆかりの宿。建物は今年、国登録有形文化財に。



東光庵薬師堂。大磯の鳴立庵とともに江戸時代の文人たちの交流場所として賑わいました。



芦ノ湯の松坂屋本店。上は、獅子文六の逗留した部屋。この旅館をモデルに「箱根山」を執筆。右は、敷地内に建てられた文字碑。



富士屋ホテルのメインダイニング（上）と客室・花御殿（中）と外観（下）。池波正太郎は「匂いのよい一夜」の中で、「見たこともない皇居の大食堂のようにおもえた」と記し、花御殿に泊まれば、「昭和初期の最高の贅沢」がわかるだろうと称賛。料理は池波正太郎も食したホテル自慢の「箱根虹鯉の富士屋風」。

残されています。秋山大治郎のように、溪流沿いの小道を歩いていると、ふと百年も昔にタイムスリップしたかのような心地よい錯覚を覚えることがあります。

「箱根山の交通が、山カゴと人力車だけの間は、何の騒ぎもなかった。道が開け、ガソリンのにおいが始めてから、ケンカの時代となった。」と語られています。

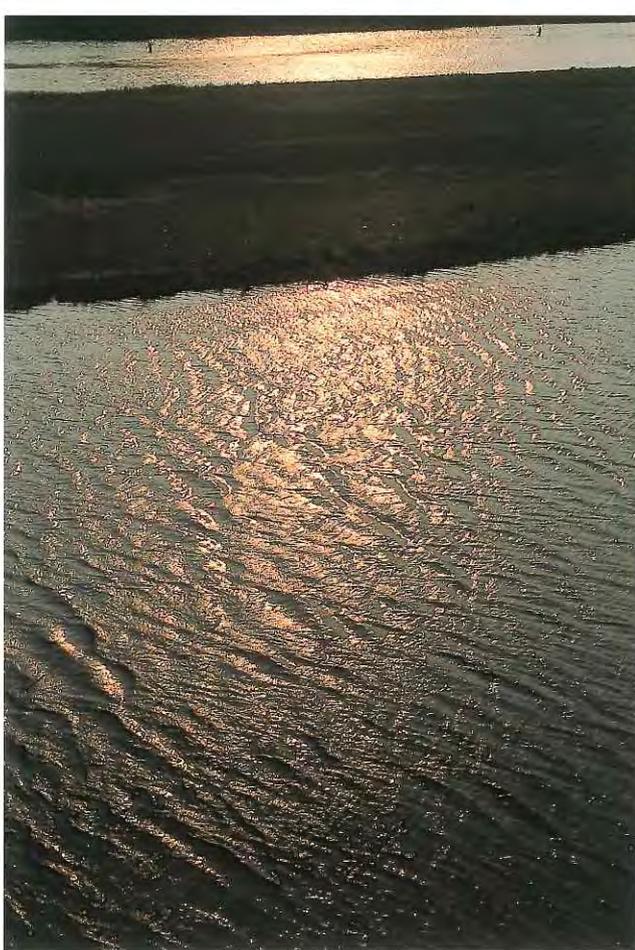
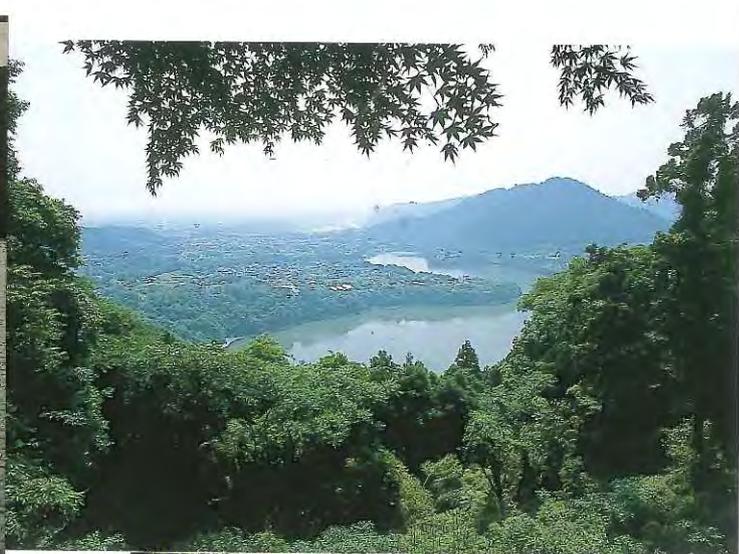
とはいえ、箱根には古き良き時代の風情が

門・水戸光圀が明国から日本へ帰化した儒学者・朱舜水をともない、塔の沢に遊んだ……と、作者は箱根の温泉史をさりげなく紹介することも忘れてはいません。

当時は駕籠が徒歩で箱根越えをしました。明治になると馬車鉄道が盛んになり、昭和に入ると自動車道が整備され、箱根は観光地として変貌を余儀なくされてゆきます。

獅子文六の「箱根山」では、観光開発に揺れる老舗旅館や新興勢力との対立・争いがユ一モアたっぷりに描かれます。

「箱根山の交通が、山カゴと人力車だけの間は、何の騒ぎもなかった。道が開け、ガソリンのにおいが始めてから、ケンカの時代となった。」と語られています。



中村雨虹の「水辺夕景」に歌われた相模川。



上と右／津久井湖畔と峯の薬師境内。峯の薬師は富田常雄「姿三四郎」の決闘の舞台に。左／中村雨虹「夕焼小焼」の碑（七沢温泉玉川館前）。

## 県史ゆかりの詩人・歌人たち

小田急線本厚木駅の近くに「ゆうやけこやけビル」という名のビルがあります。ここは詩人・中村雨虹の居住跡です。

雨虹は明治三十年、東京府南多摩郡恩方村に生まれ、東京府立青山師範学校を出たあと昭和元年末に現在の厚木東高等学校教諭となりました。雨虹が厚木へ来たころは辺り一帯は水田。そんな農村の夕暮れの風景から「夕焼小焼」の歌が生み出されました。

厚木出身の作家和田伝の文学碑には、「風唄う峠路に蝸牛はひとり白雲と語る／尾根みちはのぼりくだりほそほそと果てなくつづくが、つねに風のなかで／人もひとり行くしかない道である」と記されていますが、ここに

もかつての厚木の農村風景が描かれています。歌人・前田夕暮は秦野市の出身です。明治末期には、若山牧水と並び称されて夕暮・牧水時代といわれ、歌壇を代表する存在感を示しました。

夕暮の死後、秦野の生んだ歌人として評価する市民の声が結実し、昭和六十年に秦野市立図書館内に夕暮記念室ができ、夕暮ゆかりの小学校や高等学校に歌碑が建てられました。秦野高校正面脇の碑には、「まなかひに朝の富士あり天雲をつらぬきて赤くそびえたるかも」と記されています。

県北では、富田常雄の「姿三四郎」の舞台となった峯の薬師や、青木茂の「三太郎語」の背景をなす道志川の周辺などが知られています。

本文中の①～④の所在地は概略図を参照。



加藤武雄詞碑  
「わが日は暗し／わが夢ははるか也」(城山湖)。

箱根

◆早雲寺

北条早雲の遺命により二代氏綱が建

立した寺院①で、境内に室町時代の連歌師・宗祇の句碑や並木秋人歌碑、巖谷小波の関東大



北条早雲ゆかりの早雲寺。

震災被災者追悼句碑が。なお並木秋人は、早雲寺境内でヒメハルゼミを発見したことで知られています。

◆正眼寺

鎌倉時代に地藏信仰から生まれた寺院②で、箱根路を往来する旅人の安全祈願で栄えました。境内に芭蕉句の他、三基の句碑が。

◆大町桂月「箱根山」

「箱根に遊ぶこと前後幾十百回なるを知らず」と、箱根の魅力を伝える紀行文集。田山花袋の「箱根紀行」他、明治から昭和期にかけては多くの文人が箱根を訪れ、紀行文、短歌、俳句を残しています。

◆環翠楼

江戸時代初期に開湯した元湯に始まる温泉宿③。皇女和宮終焉の地として知られています。明治以降は、巖谷小波ほか、多くの文人が訪れています。

◆福住楼

福沢諭吉をはじめ、川端康成、吉川英治、林芙美子などの定宿④に。大佛次郎は昭和二十三年から半年間逗留。大佛次郎の小説にちなんで命名されたパールーム「福郷」。



青木茂「三太物語」の舞台になった道志川。右は、三太の碑。山北町



三島由紀夫や池波正太郎をはじめ、多くの作家に愛されてきました。池波正太郎(一九二二—一九〇)は随筆集「匂いのよい一夜」にホテルでの思い出を綴り、曾野綾子の「遠来の客たち」の舞台にもなりました。

◆東光庵薬師堂

芦之湯の東光庵⑦は、江戸時代の文化文政期に栄えた文人墨客のサロン。湯治のかたわら、碁や将棋に興じ、句会や茶会が催されました。平成十三年に約百二十年ぶりに薬師堂が復元。庭園には、江戸時代の狂歌師・太田蜀山人狂歌碑や芭蕉の句碑、国学者・賀茂真淵長歌碑などが、箱根町指定史跡。

◆松坂屋旅館本店と獅子文六

江戸時代から続く芦之湯の老舗旅館。獅子文六が定宿とした旅館⑧で、こ

◆きのくにや

こをモデルに、箱根の観光開発をめぐる騒動を描いた「箱根山」を執筆。戦時下の集団疎開体験を描いた黒井千次の「眠れる霧に」の舞台もこの旅館。小説に出てくるドイツ海軍乗組員の墓が、東光庵のある裏山に。

松坂屋本店と並ぶ芦之湯の老舗旅館⑨で、志賀直哉の「櫻」の舞台に。志賀は「大津順吉」の草稿もこの旅館で書いたという。また、作曲家の滝廉太郎は、療養のために逗留し、「箱根八里」の想を練ったといわれ、玄関脇に碑が建っています。



滝廉太郎「箱根八里」の作曲の碑。



萬翠楼福住の宣伝パンフレット(明治前期)。萬翠楼福住所蔵・報徳博物館提供。

◆富士屋ホテル  
日本で最初期の本格的洋風ホテル⑥。  
◆富士屋ホテル  
江戸時代初期創業の老舗旅館⑤。現在の建物は明治七年から五年の月日をかけて建てられた擬洋風建築。末広鉄腸「雪中梅」や森鷗外「青年」にその名が出てきます。

◆加藤武雄と城山町

加藤武雄（一八八八—一九五〇）は、津久井・城山の富裕な農家の生まれ。「郷愁」「悩ましき春」で郷土の生活を描いて注目され、人気作家として活躍しました。城山湖畔⑩に文学碑があります。

◆青木茂「三天物語」

児童文学者・青木茂（一八九七—一九八二）が道志川近辺の山村を舞台に、素材で生き生きとした子供たちの姿を描いた作品で、昭和二十三年に出版され、ラジオドラマや映画にもなり、人気を博しました。青木が道志川で釣りをするため、たびたび滞在した旅館が三天旅館⑪になり、玄関脇に文学碑が。

◆峯の薬師

津久井町の薬師山頂上付近にある峯の薬師⑫は、富田善雄（一九〇四—一六七）の出世作「姿三四郎」の、三四郎と宿敵・梅垣鉄心とが決闘する場面の舞台（作品では峰の薬師）で、「姿三四郎決闘の場」の碑が建っています。



「姿三四郎決闘の場」の碑。

◆松本清張「相模国愛甲郡中津村」

松本清張（一九〇九—一九九〇）が、明治初期に関西を中心起こった「藤田

組贖札事件」の真相に迫った短編小説。当時、愛川町にあった古い土蔵で二七札が作られていたとの噂がたち、小説の舞台に。

◆中村雨虹と相模川

「夕焼小焼」で知られる中村雨虹（一八九七—一九七二）は、昭和元年に厚木に移住。教員のかたわら詩作にうちこみ、「水辺夕景」など相模川の風景をうたった代表作を発表しています。七沢温泉玉川館⑬には、旅館の主人と親交があったことから「夕焼小焼」の碑が。郷土の作家・和田伝の詩碑も立っています。玉川館には



七沢温泉玉川館

◆和田伝「沃上」

厚木の地主の長男に生まれた和田伝（一九〇〇—八五）は、処女作「山の奥へ」をはじめ、日に日に変貌する農村の生活を描いた作家。代表作の「沃上」は、厚木の農地を舞台に土地を守る貧しい農民の姿を克明に描いています。厚木市水引に文学碑が。

◆前田夕暮と秦野

前田夕暮（一八八三—一九五〇）は、秦野の豪農の長男として生まれ、のちに自由律短歌運動の中心として活躍。幼少年期の思い出や故郷の風景を詩や歌に詠んでいます。「ひまわりは金の油を身にあげてゆらりと高し日のちいささよ」の歌碑が秦野市・大根小学校⑭に。ほかに秦野市の権現山や秦野高校にも歌碑が。

県立神奈川近代文学館のご案内

常設展示室では〔神奈川の風光と文学〕をテーマに、神奈川とゆかりの深い作家と作品を、横浜、川崎、県央・県西、三浦・湘南、鎌倉の5地域に分けて紹介しています。

作品が理解しやすいように、自筆原稿、創作ノート、初版本などの資料に加え、パネルや模型により立体的に展示し、また、夏目漱石の書斎を模した空間に、遺品や書画を常時、展示しています。



展示館正面。



夏目漱石の書斎を復元するなど、楽しみながら名作と親しめるように展示。

井上靖展 詩と物語の大河

～北国 氷壁 敦煌 しろばんば 孔子～

10月4日(土)～11月16日(日)

●1949(昭和24)年「狐銃」での作家デビュー。翌1950年「闘牛」での芥川賞受賞から、1991(平成3)年に亡くなるまでの40年に及ぶ作家活動を中心に紹介します。

井上靖展 講演会

椎名誠(作家)凍った大地・砂の海

～井上靖文学の舞台を歩いてきて～

2003年10月11日(土)

開演●午後2時(開場午後1時30分) チケット●1000円(友の会800円)  
神奈川近代文学館ミュージアムショップで販売。

県立神奈川近代文学館

〒231-0862 横浜市中区山手町110 ☎045-622-6666

ホームページ●http://www.kanabun.or.jp

休館日●月曜日、祝日の翌日(土・日は開館) 入館料●大人250円、学生150円 当館への最寄りの交通機関●〈横浜市営バス〉①桜木町駅～保土ヶ谷駅または②横浜駅～桜木町駅～山手駅 いずれも港の見える丘公園駅下車・徒歩3分〈JR根岸線〉石川町駅下車 徒歩20分

## 「マイウェイ」バックナンバーのご紹介

### 「マイウェイ」特集企画一覧

- 1号 (平成元年3月) ●鎌倉の自然散策 田村隆一さん
- 2号 (平成元年10月) ●緑の小島 江の島へ 斎藤栄さん
- 3号 (平成2年3月) ●真鶴、湯河原 岬と湯の旅 小林久三さん
- 4号 (平成2年9月) ●多摩の里から大山へ 岡本喜八さん
- 5号 (平成3年2月) ●西湘 早春の旅 桐島洋子さん
- 6号 (平成3年9月) ●西丹沢周遊、ハイキングといで湯の旅 美坂哲男さん
- 7号 (平成4年3月) ●葉山、油壺、城ヶ島の旅 堀口すみれ子さん
- 8号 (平成4年10月) ●相模原、飯山観音の旅 金子辰雄さん
- 9号 (平成5年3月) ●さらめく風に誘われて 鎌倉散歩 山内美郷さん
- 10号 (平成5年6月) ●金沢八景散歩
- 11号 (平成5年8月) ●箱根秋色散歩
- 12号 (平成5年12月) ●中川一政の美の世界に遊ぶ
- 13号 (平成6年3月) ●のんびりゆったり湘南美術散歩
- 14号 (平成6年6月) ●南武線みちくさ紀行
- 15号 (平成6年9月) ●南足柄いこしえロマン探訪
- 16号 (平成6年12月) ●茅ヶ崎&藤沢 日だまり散歩
- 17号 (平成7年2月) ●小田原城下町紀行
- 18号 (平成7年7月) ●相模湖周辺 谷間のいで湯と里山歩き
- 19号 (平成7年10月) ●松竹大船影所物語
- 20号 (平成7年12月) ●三崎マクロ物語
- 21号 (平成8年3月) ●日本民家園物語
- 22号 (平成8年6月) ●箱根の宿物語
- 23号 (平成8年9月) ●相模原形芝居物語
- 24号 (平成8年12月) ●横浜市場物語
- 25号 (平成9年3月) ●かながわ桜物語
- 26号 (平成9年6月) ●かながわガーデニング物語
- 27号 (平成9年9月) ●古寺物語 横須賀・三浦一
- 28号 (平成9年12月) ●かながわ野菜物語
- 29号 (平成10年3月) ●かながわ農村歌舞伎物語
- 30号 (平成10年6月) ●かながわ地酒物語
- 31号 (平成10年9月) ●かながわ陶芸物語
- 32号 (平成10年12月) ●相模湾さかな物語
- 33号 (平成11年3月) ●鎌倉「家」物語
- 34号 (平成11年6月) ●「丹沢の森」物語
- 35号 (平成11年9月) ●藤沢今昔物語
- 36号 (平成11年12月) ●小平地魚物語
- 37号 (平成12年3月) ●かながわバラ物語
- 38号 (平成12年6月) ●足柄お茶物語
- 39号 (平成12年9月) ●かながわの東海道物語
- 40号 (平成12年12月) ●湯河原まち物語
- 41号 (平成13年3月) ●かながわ図書館物語
- 42号 (平成13年6月) ●かながわ「水の道」物語
- 43号 (平成13年9月) ●川崎果樹物語
- 44号 (平成13年12月) ●鎌倉切通物語
- 45号 (平成14年3月) ●かながわ森林公園物語
- 46号 (平成14年6月) ●かながわ私語対博物館物語
- 47号 (平成14年9月) ●横浜商店街物語
- 48号 (平成14年12月) ●かながわ梅物語
- 49号 (平成15年3月) ●かながわ河川水辺物語



47号～49号

## はまぎん産業文化振興財団のご紹介

当財団は、昭和六十三年に横浜銀行の創立七十周年記念事業の一環として設立された財団法人です。産業と文化の両面から地域の皆さまの生活の充実と向上に寄与することを目的として、つぎの事業活動をおこなっております。

### 一、中小企業青年従業員の海外派遣

神奈川県と共催して、「中小企業技術者等海外派遣団」(昭和四十五年開始)と「商業従業者海外派遣団」(平成元年開始)を欧州各国への視察研修に派遣しております。この派遣には八百名を超える青年従業者が参加しております。

### 二、機関紙「マイウェイ」の発行

「マイウェイ」は、小冊子ながら魅力あふれた地域の文化情報誌として幅広い年齢層の方々からご愛読をいただいております。なお、「マイウェイ」は、横浜銀行の各支店や神奈川県内の行政機関に配付しております。



1号～3号

### 三、自主催事の開催

「はまぎんホール ヴィアマーレ」におきまして、講演会や演奏会等を主催しております。平成十五年度は、「文化講演会」、「はまぎん寄席」、「ファミリー・クラシック・コンサート」の開催を予定しております。

### 四、文化・スポーツ振興への助成

美術や文学の受賞者への褒賞贈呈、音楽活動への支援、心身障害児者スポーツ大会への参加費や成人式祝い品の贈呈など各種事業や活動への助成・支援を実施しております。

### 五、「はまぎんホール ヴィアマーレ」の貸館運営

「はまぎんホール ヴィアマーレ」を皆さまの研修会、演奏会、講演会など様々な催しの会場として、ご提供(有料)をしております。

## 「マイウェイ50号発刊記念文化講演会」 荻野アンナ講演会

### 「やつパリ ヨコハマ」

日時●2003年11月30日(日) 開演14時(開場13時30分)

講演時間 約90分

会場●はまぎんホール ヴィアマール

主催●財団法人はまぎん産業文化振興財団 協賛●横浜銀行

入場料●無料「全席自由」※未就学児童はご遠慮ください。

申込方法●往復ハガキに住所・氏名・職業・年齢・電話番号を記入の上

はまぎん産業文化振興財団「やつパリ ヨコハマ」係り(住所左記)

まで郵送にてお申し込みください。(往復ハガキ1枚で2名までの

申し込み 応募者多数の場合は抽選)

申込締切●11月4日(火) 消印有効

お問い合わせ●財団法人はまぎん産業文化振興財団

〒220-8611 横浜市西区みなとみらい3-1-1

☎045-2255-2171

☎045-2255-2173



おぎの・あんな●作家、慶應義塾大学文学部教授(仏文)。横浜生まれ。慶應義塾大学大学院終了後、ソルボンヌ大学で博士号を取得。その後小説を書き始め、1991年「背負い水」で芥川賞受賞。2002年読売文学賞受賞。執筆活動の他、テレビ、ラジオにも出演。代表作に「アイ・ラブ・安吾」「ホラ吹きアンリの冒険」など。

●はまぎんホール ヴィアマール

横浜市西区みなとみらい3-1-1 (横浜銀行本店1階)

電話●045(2255)2173

交通●桜木町駅「J線・東急東横線・横浜市営地下鉄線」下車「勤労歩道利用」5分

http://www.yokohama-viamare.or.jp/

※「マイウェイ」へのご意見・ご要望は

info@yokohama-viamare.or.jp まで  
お気軽にお寄せください。

## 編集後記

〈はまぎん〉からのお知らせ

### 「年金」電話相談サービス (無料)のご案内

年金制度や年金請求の手続き方法など、年金に関する疑問に何でもお答えいたします。

また、年金に関連した雇用保険制度、健康保険制度についてのご相談や

「年金教室」のお申し込みも承ります。お気軽にお電話ください。

### ●はまぎん年金デスク

フリーダイヤル ☎0120(3334)089

### ●相談受付日 銀行窓口営業日

●相談受付時間 9時～17時

一口に「文学」と申ししても、皆さまそれぞれが深い思いをお持ちのことと存じます。「文学」について、広辞苑を紐解きますと、「想像の力を借り、言語によって外界および内界を表現する芸術作品。すなわち詩歌、小説、物語、戯曲、評論、随筆など」と記されており、

今回の記念号では、幅広い文学のジャンルの中から、主に明治以降の小説・詩歌を中心に、県内各地に残る文学作品や作者の足跡をご紹介するとともに、散策をも併せて楽しんでいただけるよう構成いたしました。

編集に当たりまして、神奈川を舞台にして創作された多様な作品数に圧倒され、文学の宝庫としての神奈川をつくづく実感いたしました。

このことは、取りも直さず、私たちの故郷が多様な文化に恵まれた豊かな土壌にあることの証にちがひありません。なにもにも誌面に限りがありますが、とから、ご満足いただけないところも多々あるかと存じますが、この記念号が神奈川の文学へのご案内の書として、より多くの方々に、ご愛用いただけ得るならば、まことに幸いです。

最後にになりましたが、記念号の監修をお引き受けいただいた神奈川近代文学館、ご執筆いただいた山川彰氏、仲川与志氏、貴重な資料のご提供など、発刊に多大なご協力をいただきました関係者の皆さま方に改めて御礼を申し上げます。

なお、次号「かながわ精進料理物語」は、来春刊行の予定です。引き続きご愛読のほどよろしくお願ひ申し上げます。

事務局長 清水照雄